

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書第5冊

史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書IV

鵜羽神社境内遺跡

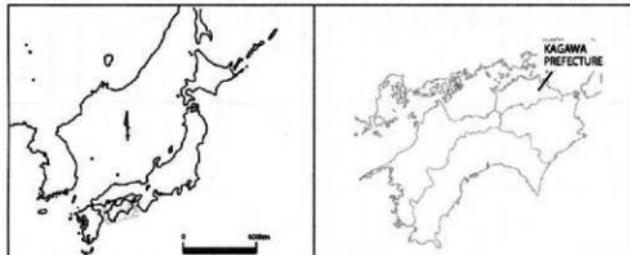
2022年3月

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部

例　　言

- 1 本書は、高松市内に所在する鶴羽神社境内遺跡についての報告書である。
- 2 調査地、期間及び調査面積は、次のとおりである。
 - 平成24年7月7日～21日（地形測量）
 - 平成25年8月20日～9月3日
 - 平成26年8月19日～9月8日
 - 平成27年8月17日～9月8日
- 3 現地調査及び整理作業は、高松市教育委員会と徳島文理大学文学部が締結した連携協定に基づき実施した。
- 4 現地調査は、高松市創造都市推進局文化財課 文化財専門員 高上拓と、徳島文理大学文学部文化財学科教授 大久保徹也が担当した。
- 5 整理作業は大久保が担当し、高上が補佐した。
- 6 本報告書の執筆は、第1・2章を高上が行い、それ以外を大久保が行った。編集は高上が行った。
- 7 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関及び諸氏から御教示及び御協力を得た。

鶴羽神社氏子御一同 浦生自治会 宗教法人鶴羽神社
- 8 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。
- 9 遺構の縮尺については図面ごとに示している
- 10 上記で得られた全ての資料は、本書刊行後に全て高松市教育委員会で保管している。



本文目次

第1章 事業の経緯と経過	1	第2節 境内地北半の調査区	9
第1節 事業の経緯	1	第3節 境内地南部の調査区	11
第2節 調査体制	1	第5章 出土遺物	16
第3節 調査目的と方法	3	第1節 弥生土器・土師器他	16
第4節 調査成果の公開	3	第2節 飯蛸壺・漁網鍤ほか土製品	19
第2章 地理的・歴史的環境	4	第3節 須恵器その他	19
第1節 地理的環境	4	第4節 製塩土器その他	20
第2節 歴史的環境	4	第6章 まとめ－鶴羽神社境内遺跡の消長	
第3章 鶴羽神社境内遺跡の地勢と調査区の配置	5	と土器製塩の展開－	27
第1節 鶴羽神社境内遺跡の地勢	5	第1節 鶴羽神社境内遺跡出土遺物の構成	27
第2節 遺物の散布状況	5	第2節 日用土器諸器種からみた活動の消長	27
第3節 調査のねらいと調査区の設定	7	第3節 鶴羽神社境内の地形区分と活動	27
第4章 各調査区の成果	8	第4節 鶴羽神社境内遺跡における土器製塩の展	
第1節 境内地南東部の調査区	8	開	28

挿図目次

図 1 鶴羽神社境内遺跡埋蔵文化財調査事業に伴う協力協定書	2	図 21 備讃瀬戸海域製塩土器年表	28
図 2 発掘調査成果報告会の様子	3	図 22 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塩土器出土地点分布 1	29
図 3 鶴羽神社境内遺物散布状態（重量比）	5	図 23 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塩土器出土地点分布 2	30
図 4 鶴羽神社境内の地形と調査区配置	6	図 24 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塩土器出土地点分布 3	31
図 5 鶴羽神社境内周辺の位置関係	7	図 25 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塩土器出土地点分布 4	32
図 6 調査区平・断面図 1 (1・5~7 tr)	8	図 26 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塩土器出土地点分布 5	33
図 7 調査区平・断面図 2 (4・8・14・15tr)	10		
図 8 調査区平・断面図 3 (9・10・12・16tr)	11		
図 9 調査区平・断面図 4 (11tr 2013 年度・2014 年度)	13		
図 10 調査区平・断面図 5 (11tr 2015 年度焼結粘土塊)	14	卷末図版 1 赤色立体図と調査地周辺の地形に関する所見	
図 11 遺物実測図 1 (各期壺類)	16	卷末図版 2 調査地周辺の段彩図	
図 12 遺物実測図 2 (各期壺類)	17		
図 13 遺物実測図 3 (鉢・高环その他土製品)	18		
図 14 遺物実測図 4 (須恵器ほか)	19		
図 15 遺物実測図 5 (備讃 II 式製塩土器)	20		
図 16 遺物実測図 6 (備讃 III・IV 式新相製塩土器)	21		
図 17 遺物実測図 7 (備讃 IV 式最新相製塩土器)	22		
図 18 遺物実測図 8 (備讃 VI 式製塩土器 1)	23		
図 19 遺物実測図 9 (備讃 VI 式製塩土器 2)	23		
図 20 遺物実測図 10 (備讃 VII 式製塩土器・燒塩土器)	24		

挿表目次

表1 掘藏遺物出土点一覧……………26

写真図版目次

- 写真図版 1
瀬戸内海と鶴羽神社境内遺跡 遠景（西から）
鶴羽神社からみた屋島 右は谷へ続く道（西から）
- 写真図版 2
調査中の鶴羽神社境内（西から）
平成 26 年度調査風景
平成 27 年度調査風景
調査後の養生状況
埋め戻し完了状況
- 写真図版 3
1 tr 完掘状況及び南壁断面
4 tr 完掘状況及び南壁断面
4 tr 断割中焼土検出状況
5tr 上面の擾乱
5～8 tr 調査状況（南から）
- 写真図版 4
5 tr 完掘状況及び南壁断面
6 tr 完掘状況及び東壁断面
6 tr 廃棄製塙土器層の拡大
- 写真図版 5
7 tr 完掘状況及び東壁断面
7tr 廃棄製塙土器層の拡大
7tr 廃棄製塙土器層の遺物密集状況
8 tr 東壁・南壁断面
8 tr 北壁断面にみる遺物包含状況
- 写真図版 6
9 tr 完掘状況及び南壁断面
10tr 完掘状況（西から）
10tr 白色凝固物塊検出状況
10tr 土器集中検出状況
- 写真図版 7
11tr 東壁土層（下面に焼結粘土塊）
11tr 北壁土層（下面に焼結粘土塊）
11tr 焼結粘土塊直下の黒灰色砂層（弥生後期土器
包含）
11tr 焼結粘土塊検出状況（堀込は 2013 年度試掘）
- 11tr 焼結粘土塊の広がりと周囲の黒化した砂層
11tr 焼結粘土塊上面と直上被覆土層（西から）
11tr 焼結粘土塊の広がり
11tr 焼結粘土塊直上の備讃Ⅲ式製塙土器出土状況
- 写真図版 8
11tr 焼結粘土塊の広がり（北から）
11tr 焼結粘土塊の広がり（西から）
11tr 焼結粘土塊東西断割部 粘土塊と直下の堆積物
11tr 粘土塊軟質部分と粘土塊直下の礫群・製塙土器
11tr 東西断割部 粘土塊の軟質部分（西から）
11tr 焼結粘土塊断割状況（南から）
11tr 東西断割（部分） 焼結粘土塊と直下の礫群・
製塙土器
11tr 東西断割（全体） 粘土塊と直下の堆積物
11tr 焼結粘土塊 貝殻細片を多数配合状況
- 写真図版 9
12tr 完掘状況及び南壁断面
14tr 完掘状況及び南壁断面
15tr 完掘状況及び南壁断面
16tr 完掘状況及び南壁断面
- 写真図版 10
弥生土器・須恵器ほか（約 1/3）
- 写真図版 11
備讃Ⅱ式～IV式最新相製塙土器・焼塙土器（約 1/2）
- 写真図版 12
備讃VI式製塙土器（約 1/3）
- 写真図版 13
16tr 白色凝固物出土状況
白色凝固物 1（16tr）
白色凝固物 2（11tr）
白色凝固物 1（16tr）60 倍拡大撮影
白色凝固物 1 部分拡大（草本類茎痕）
白色凝固物 1 部分拡大（微小貝類混入）
白色凝固物 3（11tr）平坦面と草本類茎痕
- 写真図版 14～16
製塙土器素地観察写真（250 倍撮影）

第1章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯

高松市教育委員会と徳島文理大学文学部は、特に埋蔵文化財の分野において、平成18年度の金石2号墳確認調査（大久保2007）から、平成20年度の御厩天神社古墳・石ヶ鼻古墳測量調査（高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科2009）、平成20～24年度の船岡山古墳群（高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科2017・2019・2020）、平成28年度～30年度の剝抜式石棺調査（高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科2021）と、共同調査の実績を積み上げてきた。本書は、平成24～27年度に実施した、高松市屋島西町に所在する鶴羽神社境内遺跡の発掘調査報告書である。

高松市では、史跡・天然記念物屋島の基礎調査事業を平成7年度から実施している。この調査の経緯等と成果は、（高松市教育委員会2019）に詳しい。近年では、香川大学や京都府立大学と連携し、新たな視点で天然記念物や名勝としての屋島の価値の掘り起こし調査が行われる（高松市・香川大学天然記念物屋島調査団2014、高松市・京都府公立大学法人2016）等、継続的かつ多角的な調査がなされている。こうした状況も背景に、高松市教育委員会と徳島文理大学文学部では調査対象遺跡の検討を行った。その際に、散布する製塩土器片の量から大規模な操業が推定される（高松市教委1981・2008・2019等）が、実態の不明瞭な製塩遺跡であった鶴羽神社境内遺跡を調査対象とすることについて合意を形成し、土地所有者である宗教法人鶴羽神社と協議の結果、調査の許可を得ることができた。これを受け、調査目的を鶴羽神社境内遺跡における土器製塩の実態把握に設定し、以下で報告する発掘調査を実施した。平成24年度に地形測量を実施し、平成25～27年度の3ヵ年で発掘調査を実施した。発掘調査は、大学の夏休み期間を中心に対象地にて実施した。なお、調査の実施にあたっては、宗教法人鶴羽神社及び鶴羽神社氏子一同並びに浦生地区自治会の皆様より多大なるご助力をいただいた。記して改めて謝意を表したい。

第2節 調査体制

高松市教育委員会と徳島文理大学文学部では、平成22年2月に連携協定を文書で取りかわし、相互協力して、対象遺跡の実態解明に取り組む体制を構築している。本件に関しては、宗教法人鶴羽神社・徳島文理大学文学部・高松市教育委員会の連名で、平成24年6月に「鶴羽神社境内遺跡埋蔵文化財調査事業に伴う協力協定書」を締結し、調査を実施した。また、史跡・天然記念物屋島の現状変更を伴う調査であったため、以下行った手続き等について報告する。

発掘調査の実施にあたっては、事前の協議で当該年度の調査範囲を定め、現状変更の申請を連名で行う。調査完了後の現状変更完了届についても同様である。なお、原図類は原則各調査主体で保管しているが、本書刊行後には徳島文理大学文学部が複写を保管し、高松市教育委員会が原図を一括して保管する計画である。出土遺物については、報告書作成までは徳島文理大学文学部で保管し、以後は高松市教育委員会で保管することとした。

高松市教育委員会の調査担当者は例言のとおりである。徳島文理大学文学部の調査参加者は以下のとおり。

平成24(2012)年度：浅海瑛里香 片山達也 木村遼馬 橋大河 渡邊友佳

平成25(2013)年度：穴吹香祐 片山達也 木村遼馬 高橋沙織 澄川未来 美馬広河 八塚祐樹 山本修平

平成26(2014)年度：穴吹香祐 小川翼 齊藤麻緑 清水普未 澄川未来 田中達也 日野優香 福家萌希
美馬広河 山本和暉 山本修平 吉井悠介 芳野裕成

平成27(2015)年度：倉橋和希 清水普未 高瀬崇宏 澄川未来 竹内詩織 次田裕 日野優香 福家萌希
松本就也 松本恭輝 山崎徹 山本和暉 山本拓未 芳野裕成

鶴羽神社境内遺跡埋蔵文化財調査事業に伴う協力協定書

この協定を證するため本書3部を作成し、甲、乙および丙が記名押印の上、各自1通を保持する。

平成24年6月14日

1. 事業の内容
良好な協力関係として地元の鶴羽神社境内遺跡の調査を担当するため、測量・発掘・整理等の
作業の実施を行ふものである。調査は原住民教育員と他島文理大学学生が連携して実施する。
其の調査をして実施する。また、調査にあたっては原住民へ精神的威力を得て施すため、以下
にその方法を定めるものである。

前条の事業について、原住民へ精神的威力（以下「甲」とい）、他島文理大学文理学部（以下「乙」と
いり）、および原住民教育員（以下「丙」とい）とは、次の事項により種族・文化財調査事業に關
する協定を締結する。

第1条 この協定は、鹿児島県鹿児町268番に在する鶴羽神社境内において実施する埋蔵文化財調査に
かかる。甲、乙および丙の分担を定めること目的とする。

第2条 甲、乙および丙は、信義を重んじ誠実に、この協定を履行しなければならない。

第3条 この協定の調査対象となる埋蔵文化財は、次のとおりとする。

- (1) 調査名 鶴羽神社境内遺跡
- (2) 所在地 鹿児島県鹿児町268
- (3) 面積 約200畝

第4条 埋蔵文化財調査に要する経費は、乙および丙の負担とする。

第5条 甲は、発掘された出土品の所有・保管については乙および丙間に一任するものとする。

2. 対物に関する文書保証および遺失物等に関する手続は、乙および丙が代行するものとする。

第6条 乙および丙は、発掘調査終了後、調査区を埋め戻すことにより現状復旧を行うものとする。

第7条 この協定に定めない事項、または、この協定について疑義生じた事項については、甲、乙
および丙が協議して定めるものとする。

甲 鹿児島市鶴羽町2番9号
元法人鶴羽神社
代表役員 鶴井 勝英

乙 さぬき市出度1314-1
他島文理大学文部
文学部長 鶴井 勝英

丙 鹿児島市鶴町一丁目8番15号
鹿児島市教育委員会
斎藤辰一
松井 博夫 等

第3節 調査目的と方法

弥生時代～奈良時代の土器製塩遺跡は、瀬戸内海沿岸地方に多く分布するが、海浜環境の変化により良好な遺存状態を推測できる事例は少ない。とくに高松市域を含む香川県本土部東半では、詳細が判明する遺跡はほぼ皆無である。こうした状況のもと、鵜羽神社境内遺跡を調査対象として選定した。

鵜羽神社境内を中心に、製塩土器片が多量に分布することは調査前から判明していた。今回の調査は、地形の把握から始め、まずは地形図を作成するとともに、グリッドを作成し表面に散布する製塩土器片の分布状況を調査した。その後、土器製塩の操業時期と規模の把握を主目的とし、境内に1m×1mの小規模な調査区を複数設定し、発掘調査を行った。掘削は全て人力で行い、手書きで記録図面を作成するとともに、写真は35mmフィルムカメラとデジタルカメラを併用して撮影した。調査完了後、遺構面の保護のために海砂を敷きつめ、その上に掘削土を用いて埋め戻した。



図2 発掘調査成果報告会の様子

第4節 調査成果の公開

高松市教育委員会と徳島文理大学文学部は、調査成果を各種刊行物や成果報告会の開催等で公開してきた。本書刊行を以て一連の調査成果の正式な公開とするが、これ以前に実施した内容は以下のとおり。

発掘調査成果報告会

平成25年9月1日実施。会場：浦生公民館。参加者30人

既往の刊行物

成果の一部は以下の刊行物で報告している。

高松市教育委員会 2014「鵜羽神社境内遺跡」『平成25年度市内遺跡発掘調査概報』

高松市教育委員会 2015「鵜羽神社境内遺跡」『平成26年度市内遺跡発掘調査概報』

高松市教育委員会 2016「鵜羽神社境内遺跡」『平成27年度市内遺跡発掘調査概報』

《参考文献》

大久保徹也 2007「金石2号墳」『高松市内遺跡発掘調査概報－平成18年度国庫補助事業－』高松市教育委員会
高松市教育委員会 1981『屋島城跡』

高松市教育委員会 2008『屋島城跡II』

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科 2009『石ヶ鼻古墳 御殿天神社古墳』

高松市・香川大学天然記念物屋島調査団 2014『天然記念物屋島調査報告書』

高松市・京都府公立大学法人 2016『屋島名勝調査報告書』

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科 2017・2019・2020『船岡山古墳群I・II・III』

高松市教育委員会 2019『史跡天然記念物屋島』史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書III

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科 2021『高松市内所在剝式石棺調査報告書I』

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

屋島の地理的・地質的環境はすでに繰り返し詳細に整理されている（高松市教育委員会 2019 等）。ここでは、鶴羽神社周辺に限定して、微地形の特徴を整理したい（巻末図版1・2参照）。

鶴羽神社境内遺跡は、屋島の西側に位置する。やや巨視的にみると、屋島北嶺と南嶺を隔てる谷筋から広がる小さな扇状地の末端附近にあたり、すぐ西側には海岸線が迫る。周囲には、谷からの流水を供給源とする小河川（水路）が複数存在し、海側（西側）へ流下する。断彩図で周囲の起伏をみると、鶴羽神社境内遺跡は、海岸線から一度内陸側に向かって標高が下がり、さらに山側にやや標高が高くなった地点に位置することが分かる。道路造成等による後世の影響も考慮する必要はあるが、起伏を旧地形として理解すると、浜堤背面の低地部を挟んで山側の微高地上に相当すると整理することが可能であろう。

第2節 歴史的環境

屋島の歴史的環境についても同じく既に詳細な整理がなされている。ここでは鶴羽神社境内遺跡と関係する時期及び浦生地区周辺での製塩に関連する事象に限定して若干の整理を行う。

屋島山上では弥生時代中期に遡る遺物群が確認されるが、調査地周辺で確認できる生業の痕跡は、鶴羽神社境内で確認した弥生時代後期初頭が最初である。その後断続的に7世紀代まで土器製塩が営まれたことが判明した。また、出土遺物の中には少量ながら蜻蛉等の漁労具も含まれることから、海を場とした生業が営まれていたことがうかがえる。同地区では古墳は確認されないが、周辺では前期古墳として浜北古墳群、中期には長崎鼻古墳が認められるほか、南嶺の麓に後期古墳が集中することが報告されている。

飛鳥時代には、山上を中心に古代山城「屋嶋城」が築造される。鶴羽神社周辺でも、谷を遡った地点に通称「浦生の石壁」と呼ばれる、古代山上の城壁が確認された。近年発掘調査を行い、報告書では屋嶋城浦生地区と呼称している（高松市教育委員会 2019）。鶴羽神社境内遺跡では、この古代山城築造に近接する時期の製塩土器が採集されており、屋島西浜における古代山城の築城と生業の変化に関する成果が得られることもまた期待された。

浦生地区周辺では、鶴羽神社境内遺跡周辺における土器製塩の終焉後も、製法を変えつつ製塩業が盛んに営まれる。明確な痕跡は未確認であるが、文安2（1445）年の『兵庫北閑入船納帳』に「片本塩」の記載があり、屋島周辺で中世段階にも製塩が行われていた可能性が指摘されている。近世になると、浦生地区よりもやや南西側の沿岸部浅瀬が干拓され、広大な入浜式塩田が形成される。一例として浦生地区に近い屋島南西岸の塩田を挙げると、宝暦5（1755）年の姿の浜塩田、天保12（1841）年の湯元新浜などが知られる。近代以降も塩田の開拓は進み、併行して製塩の採穫、煎ごう方法の技術革新に対応しつつ、昭和46（1971）年の製塩廃止まで一大塩生産地として屋島での製塩は続けられた。

なお、鶴羽神社について概要を触ると、祭神は鶴草葺不合命（ウガヤフキアエズノミコト）、社伝として天平勝宝年間（749～757）に唐の鑑真和尚が浦生に來訪し、当社に請願して屋島に登ったと伝えられている。社殿の変遷等についての検討は未だ詳細になされていない。本書は神社境内における土器製塩の実態解明を目的に行った調査の報告である。

《参考文献》

- 高松市教育委員会 2019『史跡天然記念物屋島』史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書III
屋島風土記編纂委員会 2012『屋島風土記』

第3章 鵜羽神社境内遺跡の地勢と調査区の配置

第1節 鵜羽神社境内遺跡の地勢

浦生地区の中央に位置する鵜羽神社境内地は東西約36m、南北約26mの広がりがある。現在は防潮堤まで約70m隔たるが、かつては境内地前面がすぐ汀線であったと思われる。

発掘調査に先立ち、境内地の微地形を確認するために地形測量を行った。境内地の南東隅が最も高く標高3.4mで、そこから概ね南北方向に緩く下降する。5mほど離れた本殿基壇付近で標高2.7m、それより西方ではほとんど平坦となり、拝殿前面は標高2.4m前後で、顕著な段差はないまま防潮堤に至る。

こうした地形は環境整備で助長されている面もあるが、周辺地勢を勘案すれば境内地の東南は山麓扇状地形前面の傾斜を反映し、西半部は山麓扇状地の前面にとりつく海浜砂堆（裏面）に相当するだろう。また境内地の北側には山腹から下る谷地形が想定され、境内地北部はその影響を受けている可能性がある。

このような理解を基礎に調査を進めた。

第2節 遺物の散布状況

地形測量の後に境内地全域に2mメッシュを設定し、地区ごとに地表に散布する遺物を採集した。なお、本書で使用する製塙土器の分類については第6章に整理しており、備讃I～VII式に区分する（図21）。散布遺物の圧倒的大部分は土師質土器類の細片で、多くは備讃VI式製塙土器片であった。遺物散布傾向は、重量比で図3に示している。境内地の東半部、とくに本殿基壇の裏面附近から南側に多く、逆に拝殿前面（境内地西半部）ではほとんど遺物散布が認められなかった。拝殿の周囲は客土して整え、あわせて常時的な清掃活動によって土器細片なども片付けられているとみられる。

境内地東半には多くの遺物が散布する。本殿基壇の裏面附近や南東側の相対的な高所部に散布が濃密であるのは、境内地の環境整備で助長された面も少なくないが、この部分が南東方向から続く扇状地形の先端に相当すること

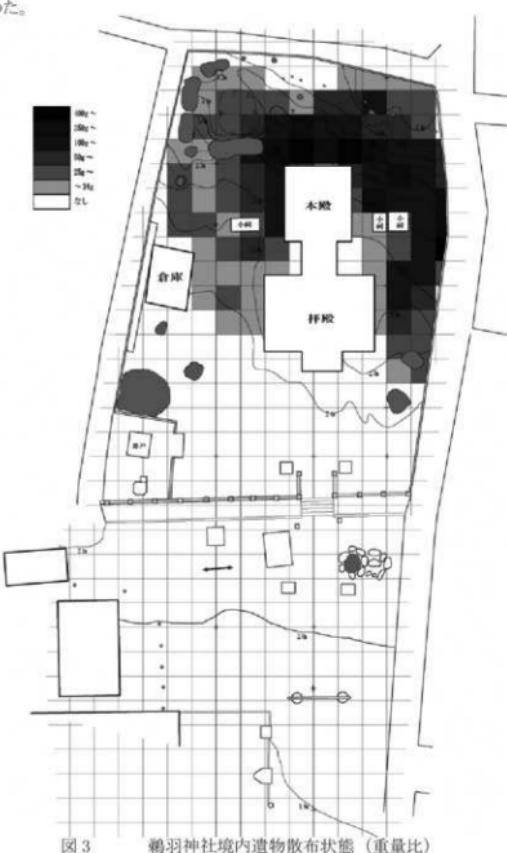


図3 鵜羽神社境内遺物散布状態（重量比）

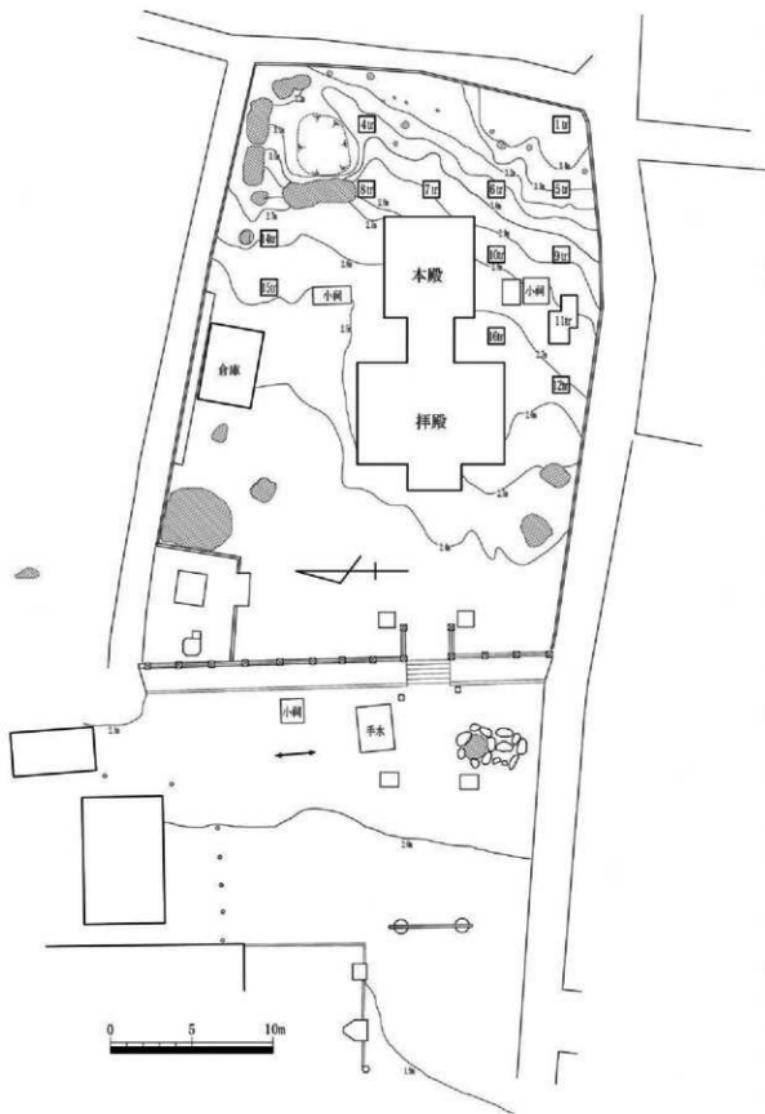


図4 鶴羽神社境内の地形と調査区配置

との関連も注意され、本来的な遺跡の構造を反映する可能性が想定できる。境内地周辺は建物が密集し、詳細の把握は難しいが、小径を挟んで境内地南東の高所から連続する南側畠地や、この前面を切り下げて設けた体育館（旧浦生小学校跡地）の裏面では備讃VI式製塙土器細片若干量が散布する（図5）。その一方、境内地からさほど隔たることなく北方に展開する砂堆上に営まれた墓地域では地表に遺物散布をみない。以上の周辺地形と遺物散布状況を勘査して次項で示す調査計画を立てた。

第3節 調査のねらいと調査区の設定

遺物散布傾向の把握に用いた2mメッシュを基準として、境内地の南東から各々3mの間隔で1m四方の小調査区を設定して調査を進めた。第一に遺物散布が著しい境内地南東側の相対的な高所=扇状地形先端付近における遺物包含状態と地下遺構の有無を確認すること、第二に境内の環境整備=客土（本文中では置き土・敷き均し土等と呼称）によって地下の状況がわからない拝殿南側付近の遺物包含状態等を把握することをねらった。境内地周辺の地形から扇状地前面に取り付くであろう海浜砂堆が拝殿付近にまで及ぶことが推測された。また境内地北東、本殿・拝殿北側は、境内地北側に想定される谷地形に接する緩傾斜地形が想定され、第三にその部分における遺物包含状況等の確認を目指した。

平成25（2013）年度は当初、境内地東南部を中心に10地点（1・4～12tr）に小調査区を設定した。うち1・5～7trは南東側高所=推定扇状地形先端部、4・8trは北側谷部に向かう傾斜地想定位置、また9～12trは前面砂堆ないし扇状地形から砂堆に移行する地点、の状況把握をねらった。各調査区では表層及び想定される客土を除去して遺物包含層を検出した上で、その一部を断ち割って堆積状態を把握することとした。

平成26（2014）年度は4・8trの調査所見から、あらたに境内地北側に14・15trを設定して引き続き北側傾斜地形を追求した。合わせて11tr下層で検出した特異な焼結粘土塊の広がりと性格を追求するため、これを拡張した。なお11trは前年度の調査所見で扇状地形前面の海浜砂堆に相当することが推測された。

さらに平成27（2015）年度は引き続き11trを拡張して、焼結粘土塊を追求した。また擾乱部が大きく掘り下げを停止していた10trの調査を再開し、合わせて16trを新規に設定して、11trの周辺状況を追った。

以下では扇状地形先端部（1・5～7tr）、北側谷地形側面（4・8・14・15tr）、前面移行部～砂堆（9～12・16tr）の順に、各区の調査成果を示す。なお、欠番とした2・3・13trは、当初計画したが、地上物の存在や調査期間を考慮して実施を見送ったものである。

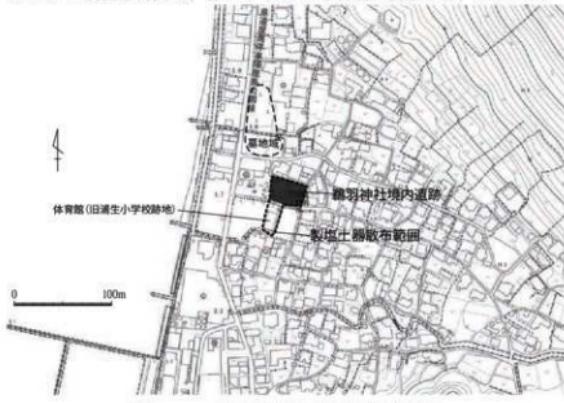


図5

鳥羽神社境内周辺の位置関係

第4章 各調査区の成果

第1節 境内地南東部の調査区（扇状地形先端部）

1 tr 境内地南東隅で周辺の地表高は3.5m。表層にある近年の置き土（層厚概ね10～15cm）を除去した後、調査区南辺の幅0.3mを地表下0.45mまで掘り下げたが、この深度まで全体が擾乱を蒙っており、ここで調査を停止した。置き土・擾乱土中に若干の土器細片を見るにすぎなかつたが、そのうちに飯蛸壺（56・57）が含まれていた。

5 tr 周辺の地表高は3.4～3.3m。残念ながら、全体にゴミ穴と見られる近年の擾乱が広がる。地表下0.5m（標高2.9m）まで掘り下げたが、このレベルで朽ちた樹根が広がり、その下方にも擾乱部が続いたため、ここで調査を停止した。

本調査区は次に示す6trの南方3mに位置し、地形的にも連続する部分にある。擾乱域に当たってしまつたため確証は得られないが、擾乱層に混入するVI式製塙土器片が極端に多いわけではなく、6・7trで確認した廃棄製塙土器の堆積層が同じ状態で本調査区周辺にまで及んだ可能性は少ないであろう。かえって少數ながら奈良～平安時代に属する少数の須恵器片などが見出されたことに留意しておきたい。

6 tr 本殿基壇の裏面側に位置し、周辺にはVI式製塙土器片が多数散布する地点で、地表高は3.2m前後となる。表層の擾乱土を除去すると、地表下0.2m（標高3m前後）で多くのVI式製塙土器片を含む黒灰色粘質土（5層）が調査区全体に広がることを確認した。この層は燃料残滓と見られる炭細粒を多く含み、硬くまる。包含する製塙土器片の大半は3～4cm角以下の細片で劣化が著しくひどく脆弱であった。地勢に応じて調査区の東半部にサブトレーナーを設定してこの層を地表下0.4m（標高2.9m）まで掘り下げた。北隅の一部でさらに製塙土器片が密集して堆積する6層の一端を見出したところで調査を停止した。層厚0.2m以上はVI式製塙土器と燃料残滓の廃棄堆積層が連続することは明らかで、5層は廃棄製塙土器層の最



図6 調査区平・断面図1 (1・5～7tr)

上部に相当するだろう。出土遺物のほぼ全てはVI式製塙土器であった。それらはVI式でもやや薄手化し口縁部に叩き縮めを加える類（166、168、169、186など）が大部分を占める。また少数のVII式製塙土器（188）と須恵器片（177）も確認できた。

7tr 6trの3m北側に位置し、本殿基壇の真裏にあたる。周辺の地表高は3m前後で6trよりわずかに下っている。表層の置き土（厚0.1m程度）を除去すると、標高2.9m前後でVI式製塙土器層の上面に達した。6trで検出した廃棄製塙土器層の様相と異ならず、また包含製塙土器の形態的特徴も同様で、6trの廃棄製塙土器層から連続するものとみられる。ただし土器層の上面検出レベルは0.1mほど低い。地形に応じたものであろうか。調査区東辺に幅0.3mのサブトレーンチを設定して土器層を掘り下げ、少なくとも10cm以上の厚さがあることを確認して調査を終えた。

出土遺物の圧倒的大部分はVI式製塙土器で、ごく少量の須恵器小片を伴うが図化可能なものはない。

第2節 境内地北半の調査区（北側谷地形側面）

4tr 境内地北東部に設定した調査区で、周辺の地表高は3m前後である。調査区の北側に繰り返し穿たれたゴミ穴の排土が周辺に及んでいる。上部の層厚10～15cm内外の黒褐色土（1層）は土器細片を少量含むがゴミ穴排土とみられる。下位の2層では小片だが多数の土器片を包含する。ただし、1層と同質のブロック土を交えており、この部分も二次的に移動した擾乱部分とみられる。包含遺物の多くは北側のゴミ穴掘削に由来する可能性が高い。調査区南半で少量の砂を交える黒色粘土（3層）を概ね標高2.5mまで掘り下げ、少量の遺物の包含を確認した。4trから南西に約4mの距離に設定した7trでは南方の6trから連続するVI式製塙土器層（上面標高2.9m）を検出しているが、それは本調査区に及んでいない可能性が高い。

また大半は小片化しているが、出土遺物の2/3程度を弥生土器・古式土師器類が占めるとみられ、須恵器類はごく少ない。この傾向は境内地南東側の構成と大きく異なっている点は注意される。

8tr 境内地の北東で4trの西3mに設定した調査区である。北東側ゴミ穴の縁辺に近い。周辺の地表高は2.8m前後で、4trより0.2mほど低い。調査区の上部全体に擾乱が及んでおり、とくに東側では擾乱部は標高2m前後にまで達し、部分的に下位の自然礫層が露呈していた。こうした礫層は境内地南半には見いだせない。これは北側の谷地形に関係する可能性がある。

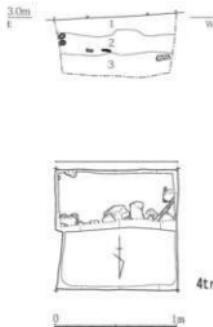
擾乱部には多くの土器片が巻き込まれており、ゴミ穴の掘削で良好な遺物包含層が破壊されたようだ。その影響を蒙らなかつたVI式製塙土器堆積層（6・7層）が北西側に一部残されていた。その上面は標高2.5mだが、本来の包含層上面は削平されているようだ。残存する層厚は0.3m、上部（6層）は6・7trのそれには及ばないが製塙土器片をかなり稠密に包含する。位置関係と包含遺物から6・7tr検出のVI式製塙土器層の延伸部分と推測される。また擾乱部混入遺物から、これとは別に日常的器種を主体とした弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層が存在した可能性が推測される。

14tr 境内地北側に設定した調査区で、本殿からおよそ6m離れた位置にある。周辺の地表高は2.6m前後。上部の0.2～0.3m、標高2.3～2.4m（1～4層）までは瓦・漆喰片など含む近年の敷き均し土で、5～9層の黒褐色系の中粒砂～シルト主体層に土器類を包含する。

その上半、標高2.1m以上、5・6層では若干のVI式製塙土器や須恵器小片を交えるが、7～9層には弥生時代後期～古墳時代初頭の土器類が比較的多く含まれ、少量のII式製塙土器片も伴う。

標高1.85m以下の風化礫を多く伴う細砂層（10層）に遺物類は見いだせない。同層の様相は8tr下層の自然礫層に近い。

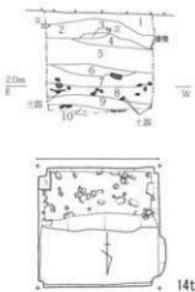
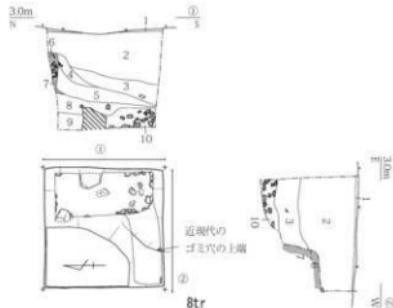
15tr 14trから3m西に隔たった地点に設定した調査区で、周辺の地表高は2.5m前後である。地表



1:10YRC/3黒曜 磁鐵砂-鐵砂 粘土20%含む しまりやや弱 黏性やや強
土器片少量含む

2:2.5YR/11黒 塗土-極磁鐵砂 ブロック状に1層を10%含む しまりやや強 黏性強
土器片多く含む

3:5YR/1黒 塗土 磁鐵砂5% しまり極強 黏性強
土器片多く含み生泥土混じるに拘らず



1.10YR7/3[黒褐色斑]・表土
2.10YR3/1[赤褐色斑]・中層
3.2.5Y3/3[茶褐色斑]・中層
4.10YR4/2[黒褐色]・下層
5.10YR4/2[黒褐色]・下層
6.2.5Y3/2[黒褐色斑]・中層
7.2.5Y3/2[黒褐色斑]・下層
8.10YR2/1[黒褐色]・下層
9.2.5Y3/2[黒褐色斑]・中層
10.2.5Y3/2[黒褐色斑]・下層

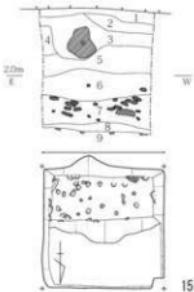


図7 調査区平・断面図2 (4・8・14・15tr)

下およそ 0.3 m、標高 2.2 m 以高は新しい境内敷き均し土とみられる。以下の黒褐色ないし黒色シルト・細砂層（5～7 層）で遺物を包含する。包含量が相対的に少ない 5、6 層では少量の須恵器や VI 式製塙土器片を交えるが、円窓が多く含む下位の 7 層（標高 1.6 ～ 1.8 m）では弥生後期～古墳時代初頭の土器類を比較的多く含む。その中には古式の布留式甕（31）や II 式新相製塙土器（94）もある。

無遺物層（8・9 層）の上面は標高 1.6 m 前後で、14tr のそれに比べ 0.2 m 程度低い。細粒物（8 層）が薄く覆うが、14tr の 10 層と同様にやはり多量の円窓を含む自然堆積層がみえる。遺物包含層の下段（7 層）に含まれる多量の大形円窓は下面の礫層に由来し、それが遊離・再堆積したものとみている。

第 3 節 境内地南部の調査区（扇状地前面移行部～砂堆）

9tr 本殿南側で境内地南辺近くに設定した調査区で、周辺の地表高 3m 前後、西にゆるやかに下る。最大で地表下 0.4 m まで擾乱が及ぶが、部分的に標高 2.8 m 以下で VI 式製塙土器の大形片を比較的多く含む堆積層（5 層）を検出した。黒灰色～黒褐色の粘質土で層厚は 10 cm 弱を測る。VI 式製塙土器の大形片が目立つが、6・7tr 廃棄製塙土器層のように密着・堆積した状況ではなく、また炭・焼土片など燃料残滓の混在も少ない。

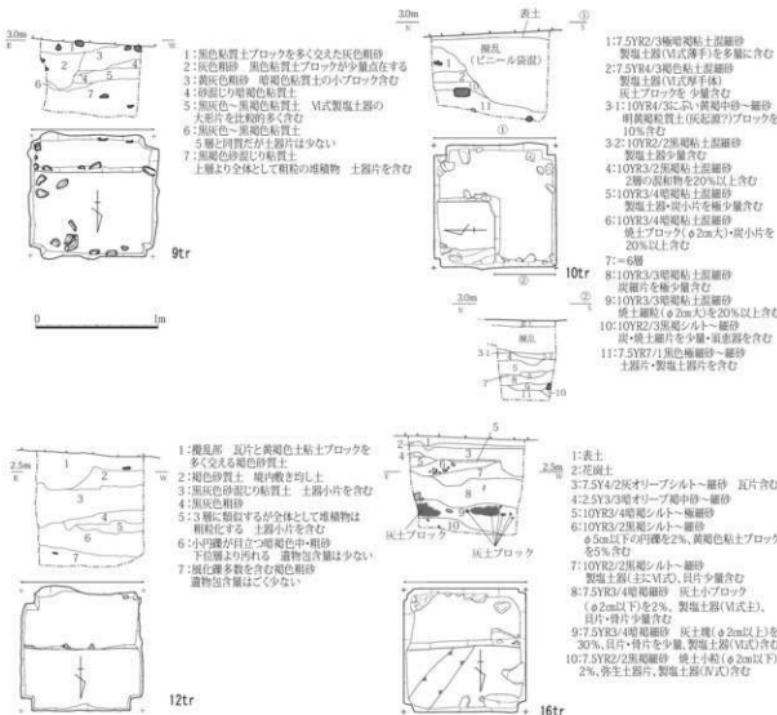


図 8 調査区平・断面図3 (9・10・12・16tr)

下位にはこの5層に比べ目立つ粗粒砂礫の混在が顕著な7層が0.3m以上の厚みを持って連続する。南・南東側の調査区、1・5～7trには見られなかった堆積物の様相である。7層の遺物の包含量は少ない。これを標高2.4m前後まで掘り下げたが変化は無く、ここで調査を終えた。

出土遺物の大半がVI式製塙土器であることは他と異ならないが、ごく少数のIII～IV式最新相製塙土器が存在する。また図化困難な小片ばかりであったが、この地点では弥生土器・古式土師器片も確認できた。VI式製塙土器は6・7trと同様にやや薄手で口縁部に叩き締めを加える類(159～162など)が多くみられた。

10tr 9trの3m北で本殿基壇に近い位置に設定した調査区である。残念ながら調査区の南東隅付近が中心となるスリバチ形の大きなゴミ穴が標高2.25mにまで達していて、大半は擾乱を蒙っていた。このため2013年度には擾乱の広がりを上面で確認して調査を停止したが、後述する11trの周辺状況を観察する目的で2015年度に新設した16trと共にあらためて調査を進めた。調査は擾乱部外に主眼をおき、調査区の南・東辺に幅0.5mのサブレンチを設定して堆積状況の確認に努めた。

標高2.5～2.9m(東壁1・2層)で、VI式製塙土器を多量に含む褐色～暗褐色を呈する包含層を確認した。下位の黒色～黒褐色シルト～細砂層(東壁10・11層)でも製塙土器その他を含む。東壁11層を標高2.2m前後まで掘り下げて調査を終えた。VI式製塙土器を多く含む東壁10・11層は、9tr下位の7層以上に粗粒の堆積物(細砂主体)が占める割合が高く、それより下位層ではいつそうその傾向を強める。

東壁10・11層のVI式製塙土器は6・7・9層で主体をなす、やや薄手で叩き締め調整を加えた類(163～165など)と共に、厚手で口縁部を強く内彎させアナグラ属の二枚貝などを押し引いて内面を仕上げる類(140、141など)を作り。下位層ではVI式製塙土器と共にこれよりは少数のII式～IV式最新相製塙土器片も出土した。また須恵器片よりも弥生土器～古式土師器片が多く確認された点もこの地点の特徴である。

11tr 境内地南辺で9trと12trの間に設定した調査区で、周辺の地表高は2.8m前後である。本調査区では下層で特異な焼結した赤色土塊を検出したため、その構造と性格を追求するため、平成27(2015)年度まで範囲を広げながら調査を重ねた。以下追求の進捗を追いかながら状況を解説する。

2013年度は他と同様に1m四方の調査区を設けた。上部には擾乱が広がっていたが、下位の堆積状況を観察する目的で、調査区東半部の掘り下げを進めた。この部分では全体的に粗粒の堆積物を主体とした。混在する礫も円磨度が高く、貝殻細片もまま交えることから9tr、12trなど周囲と同様に海浜砂堆の一部と想定された。

擾乱部の外では標高2.5m以下、標高1.75m附近まで比較的多くの遺物を含む褐色～黒褐色の粗砂・細砂の比較的薄い層の連続が観察された。標高2.4m～2.1mの各層(5～13層)では、備讃III式～IV式最新相製塙土器や古墳時代後期中葉以前の須恵器などを交えながらもVI式製塙土器の大形片を多く含む。11tr出土のVI式製塙土器は、厚手で口縁部を強く内彎させ内面に擦痕が目立つ類(132～134)が大半を占め、6tr製塙土器包含層のVI式製塙土器とは様相を異なる。VI式製塙土器はさほど密集した状況ではなく、廃棄製塙土器の二次的な移動・搅拌が想定できる。また11層～12層上面では遊離した細かな焼土塊が比較的多く認められた。

しかし下位の黒褐色粗砂層(14層)にはVI式製塙土器は含まれず、III式～IV式最新相までの製塙土器片が確認できた。そしてこの直下、標高1.9m付近で硬く焼結した赤色粘土塊が二つのブロックに分かれて検出された。粘土塊は最大6cm前後の厚みをもつ。この粘土塊は炭片など有機物で黒化した黒灰色粗砂層(17層)の上面に位置する。この粗砂層は20cmに近い厚みで堆積し、そこからII式製塙土器を含む弥生時代後期土器類が多く見出された(写真図版7)。標高1.7m以下の褐色細砂層(18層)は遺物を含まない。

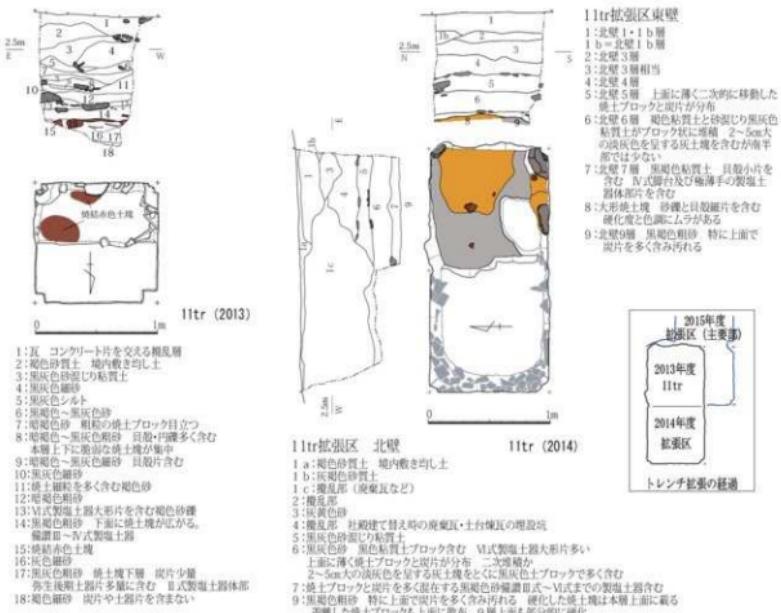


図4 調査区平・断面図4 (11tr 2013年度・2014年度)

下層で検出した焼結粘土塊は、一見したところ古墳時代後期の住居付施設を想起させる質感で、上下の堆積層包含遺物から弥生時代後期末ないし古墳時代前期に属すると推測でき、その点で構造・性格が問題となる。しかし、狭小なサブレンチ内の地表下90cm近いレベルで検出しており、2013年度は存在を確認したところで調査を終えた。

2014年度調査ではこの粘土塊を追求するため、調査区を西側で1m×1m拡張し、前年度調査区の全体と共に掘り下げ、まずは平面的広がりの追求を目指した。

西側拡張部のほぼ全体に、瓦等を廃棄したゴミ穴が大きく広がっていた。その最深部は標高2.2m付近にまで達するものであったが、幸い粘土塊の検出レベルには及んでいなかった。拡張部を作業ヤードとして残し、前年度11tr全体を検出レベルまで掘り下げて広がりを追った。

焼結粘土塊は前年度11trのほぼ北半に広がり、大局的には若干の空隙を挟んで南北2ブロックとみなすことも可能で、その東端はさらに調査区外に続くようであった（写真図版7）。

ただし粘土塊は硬度と色調に相当のムラがあり、一個の明瞭な塊ではなく大小の粘土塊の集積とみるべきものであった。とくにその縁辺では剥落した焼結粘土塊が不規則に散らばり、全体の輪郭を不明瞭なものとする。こうした状況は被熱度合いに連動するものと思われた。

また粘土塊周辺の黒褐色粗砂層（2013年度17層）上面は、検出範囲全体に炭細粒が多く散乱して同層内部以上に黒化・汚染が著しく、こうした点も加味すれば、この焼結粘土塊（群）には現地性が認められ、検出地点に二次的に廃棄されたものではない。何等かの燃焼作業に関わる施設の残骸である可能性

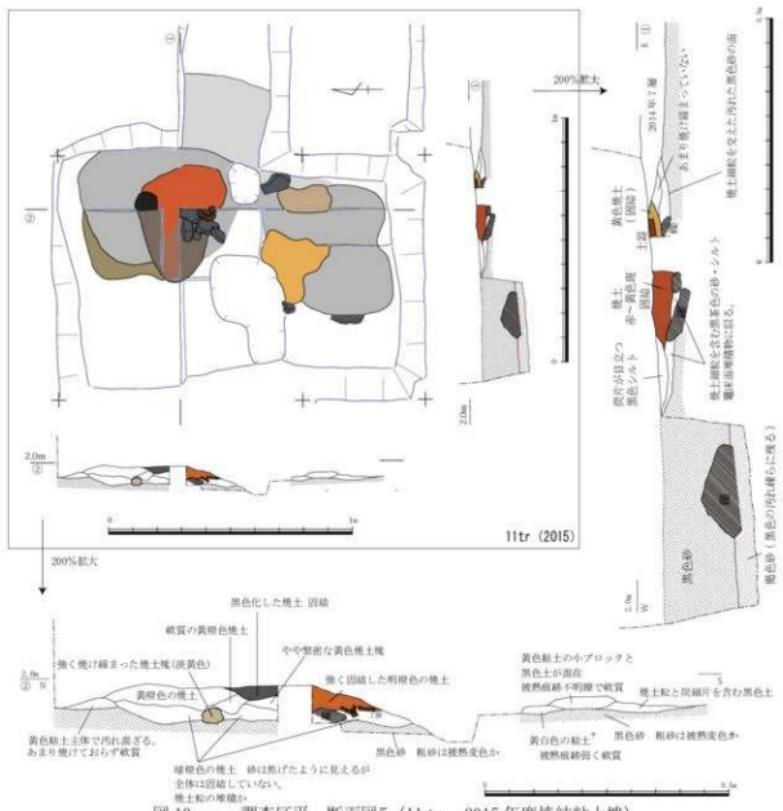


図 10 調査区平・断面図5 (11 tr 2015年度焼結粘土塊)

が想定できた。ただし上記した粘土塊（群）の色調と硬度の顕著なムラはその構造物が著しく損傷・分解していることを窺わせる。

なお粘土塊の直上でこれに密着してⅢ式製塙土器の大形片（102）が見出され（写真図版7）、粘土塊を覆う黒褐色粘質土・粗砂層（2014年東壁7層・2013年14層）でⅢ式～Ⅳ式最新相製塙土器のみを包含することから、この粘土塊の帰属時期がⅢ式製塙土器、すなわち弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に限定されることが確定した。

2015年調査では粘土塊の東辺を確認するためにさらに2013年調査区を南と東に拡張した。ただし附近には小祠石積み基段や電柱控え線の埋設があり、拡張はかなり限定した。粘土塊の東辺を一部で確認し、粘土塊（群）は全体として南北1.3m、東西0.91mの範囲に広がり、上記したように被熱度合いの差により硬度や色調を違えるブロックの集積物であることが明確になった。それらは細かく碎けた貝殻片と粗砂・細礫を大量に混入した粘土塊が被熱変質（色）したものである（写真図版8）。

その現地性を検証する目的で粘土塊の一部を二方向に断ち割って観察した。南北方向の断面では直下の砂層が粘土塊の部分では緩く凹み、粘土塊と砂層の間に前者から剥落した焼土粒と炭片などの薄い堆積を認めた（写真図版8）。また粘土塊の中央付近ではこの堆積物に埋もれるように長径数～10cm程度の円窓4点がまとまり、それに載るようⅢ式製塙土器脚台も見出された（写真図版8）。これらの上部を焼結した粘土塊が完全に覆う。また粘土塊が色調・硬度が異なるブロックの集積物であることを断面観察からも確認した。東西方向の断面観察でもこの状態は確認できた。

以上の状況を総合すれば、焼結粘土塊は、燃焼部を覆う壺状の構造物の部材とみると適切で、そうした施設がその場で崩落した状態を示すものと推測しておく。それは最大でも長径1m程度となろう。古墳時代の住居付設壺を想起させるものではあるが、砂堆という検出位置及び日常的器種がなく製塙土器ばかりが共伴することから、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の土器製塙の一工程に関係する構造物といえる。

12tr 境内地南辺で最も西寄りに設定した調査区で、拝殿南側に位置する。周辺の地表高は2.6～2.7mで西に向かいごくわずかだけ下る。およそ標高2.1m以上は社殿改築時の瓦礫などを多く交える部分（1層）と境内地の敷き均し土等からなり（2・3層）、遺物の混入量は少ない。

標高1.7m近くまで掘り下げたが、4層以下の各層は粗粒砂を主体とし、混在する疊の円磨度も高い。海浜砂堆の一部と見られる堆積層である。この上部の4・5層は炭細粒など有機物をまじえて黒化するが、最下部の7層ではそうした汚染は少ない。全体として遺物包含量は多くなく、他の地点で大多数を占めたVI式製塙土器片もここでは須恵器類や弥生土器・土師器類と同程度であった。なお7層から焼塙土器（192）が出土している。

16tr 2015年度調査で10trの西4m、11tr（拡張区）の北2.5mに設定した調査区である。周辺の地表高は2.7m前後で、上部の0.3m近く、標高2.5mまでは瓦礫や敷き均し土からなる。下位は細砂が主体の堆積層で、12trと同じように海浜砂堆の一部に相当するとみられるが、それよりも堆積物は細かい。

標高1.9m附近まで掘り下げた結果、上位の標高2.1m附近までの各層（6～9層）では弥生土器やⅢ・Ⅳ式製塙土器も少数交えるが、VI式製塙土器が卓越する。対しておおよそ標高2.1m以下黒褐色粗砂層（10層）ではⅡ～Ⅳ式の製塙土器と弥生土器・古式土師器だけを包含する。製塙土器では少数のⅡ式新相資料（93）やⅣ式最新相（128）を交えるが、主体を占めるのはⅣ式新相製塙土器の脚台部片（105～107、111～116）であった。

またVI式製塙土器包含層の下部の9層、特にその上半では特徴的な白色凝固物の大小の塊が集中的に見出された。同様の白色凝固物塊は11trの北壁6層（＝東壁6層）でも確認している。

第5章 出土遺物

第1節 弥生土器・土師器他

1～12は壺類。1は基部にハケ原体による連続刺突文を施した長頸壺頸部片で、弥生時代後期初頭に比定できる。2、3は長頸壺で各々頸部に一条の沈線をめぐらせるもので、弥生時代後期前葉～中葉に比定できる。4は強く開いた広口壺口縁部で、端部を上下に拡張して二条の沈線を加える。5も口縁部片で小さく上下に摘み出して拡張した端面の下寄りに棒状器具による押圧を連続させる。広口壺とみなしたが、器台口縁部でも良いかもしない。6は小形の広口壺口縁部で端部は上方に小さく摘み出す。7、8はサイズを異にするが同形の広口壺であろう。頸部の高さと内傾度から弥生時代後期後葉～末に比定できる。9は大形の底部片。外面は叩き締め痕をよく残し底面縁辺には削りを加える内面はハケ調整。大形鉢の可能性もある。10は短い頸部から強く屈折して長く延びる二重口縁形態。外來形態の小形壺とみた。11はやや開きの強い大形の直口壺か。端部内面を特徴的に肥厚させる形態。古墳時代前期に下るだろう。12は小形直口壺。体最大径部の鋭い屈折は古式土師器の小形丸底壺とは様相を異なる。明確な肩部の作出から弥生時代後期後葉に比定できる。ただし通有の同器種で多用される外面磨き仕上げや内面ヘラ削りを欠き、粗雑な作りである。うち、1～3・7・8・12は香東川様式土器に通じる形態だが、1類素地は1・7だけで、2・5・6は雲母細粒が目立つ高松平野東縁部に多い素地類型である。

13～40は甕類。13は小片だが端部の拡張と端面の多条沈線から弥生時代後期初頭に遡る可能性がある。14はこれには及ばないが明確な口縁端部の拡張が看取され、同後期前葉に位置づけられるだろう。

15～24、39は香東川様式の甕類。このうち15～17は口縁部の折り返しがやや鈍く香東川様式甕でも

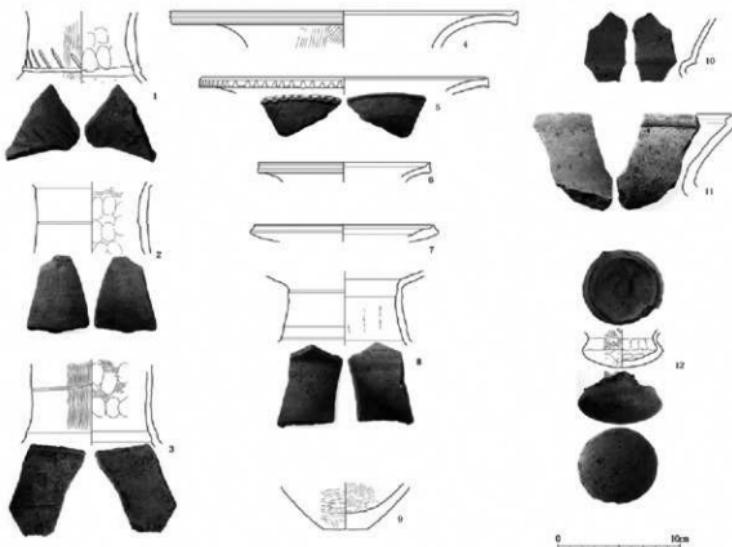


図 11 遺物実測図1 (各期壺類 1/4)

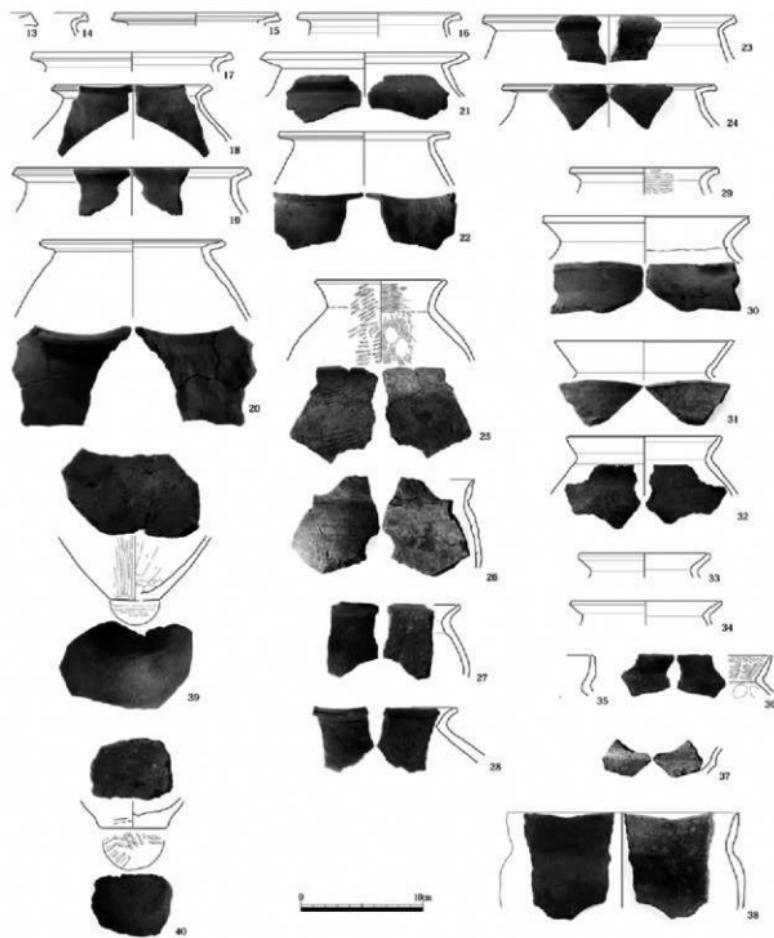


図 12 遺物実測図2 (各期甕類 1/4)

弥生時代後期中葉に位置づけうるだろう。18～24は口縁部の全般的な薄手化と折り返し部内面に鋸い稜を作出する特徴から弥生時代後期後葉を中心とした時期に比定できる。ただし口縁部が若干間延びた感のある22は古墳時代前期に下る可能性がある。39の底部は全体に薄手の作りで体下部および底部外面にヘラ磨きが残る。形状から弥生時代後期後葉に比定できる。以上は、香東川様式土器に属する甕だが、1類素地では14・16・18・21・24と半数に満たず、やはり雲母細粒が多い素地類型が目につく。

25、26は口縁部を含め外面に叩き縮め痕を残す「く」字口縁甕で、折り返しは鋸い。体部が強く張る25は古墳時代前期に下っても良い形態だ。27～30は単純な「く」字口縁甕で、内面ヘラ削りが折り返し部

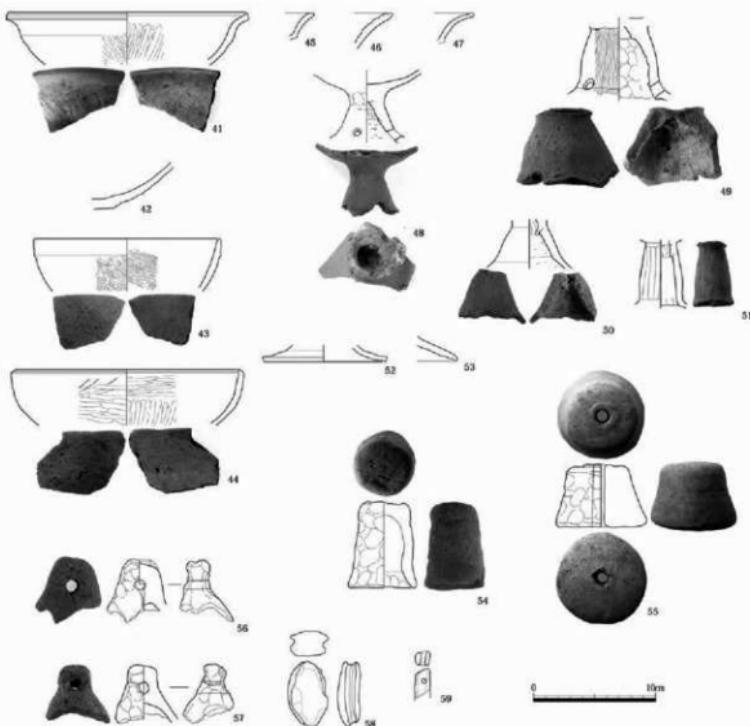


図 13 遺物実測図3 (鉢・高坏その他土製品 1/4)

に及ばない 27 は弥生時代後期中葉に比定できる。31 は古相の布留様式甕でほぼ直線的に開口部の端部内面を小さく突出させる。32 ～ 36 も布留様式甕の影響を受けた形態。全体に鈍化が進んだ 33、35 は古墳時代前期でもやや下る時期の所産だろう。37 は二重口縁形態だが小片のため詳細は不明。素地の様相が他と際立って異なる。38 は厚手で粗雑な作り。鈍く折り返した口縁部の内面に横ナデを加える以外は指押さえを強くとめる。一見、VI式製塙土器と見まがう作りだが、明確な口縁部の作出から甕とした。古墳時代後期～飛鳥時代の粗製球形甕とみなし。

41 ～ 44 は鉢形土器。口縁部を小さく折り返す 41 は端部を小さく摘上げ、内外面を放射状のヘラ磨きで仕上げる。吉備南部地域の弥生時代後期中～後葉の小形鉢に通じる。42 は大形鉢底部片。外面叩き仕上げで内面はナデ調整。内外面ハケ仕上げの 43 と粗いヘラ磨き仕上げの 44 は弥生時代後期に多くはない様相で古墳時代後期～飛鳥時代に下る可能性も皆無ではないが、出土位置から弥生時代後期としておきたい。

45 ～ 53 は高坏。45、46 は香東川様式高坏で、うち前者は1類素地である。内面回線の様態から 45 は弥生時代後期中葉に、46 は同後期後葉に比定できる。47 は強く折り返して上半を外反して大きく開く形態

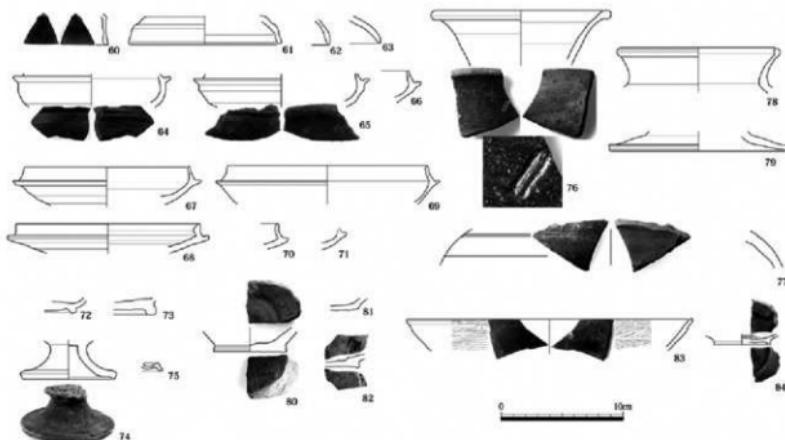


図 14 遺物実測図4（須恵器ほか 1/4）

で弥生時代後期中葉～後葉に比定できる。脚部片 48、50 は短い軸部が強く内傾する形態で弥生時代後期後葉に位置づけうる。49 の基本形も同様だが厚手で粗雑化しておりこれらより下るだろう。軸部がやや中膨らみだが円柱状を呈する 51 は古墳時代前期に下るだろう。軸部外面に幅広の縦磨きを見る。脚根片 52 は小片で復元径には不安が残る。形態的には軸・根の折り返しがまだ明確化しない弥生時代後期前葉に遡る可能性を示す。53 は僅かに内側で開く裾部で軸片 50 などに対応するものとみられ、弥生時代後期後葉に比定できる。

第2節 飯蛸壺・漁網錘ほか土製品

外面に明瞭な指押さえとどめ、粗雑な円筒形の 54 は土製支脚と推測した。この推測が妥当であれば弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭に比定できるだろう。55 は紡錘車形を呈する土製品で、出土位置からは弥生時代後期～古墳時代後期の中で位置づけるしかない。

飯蛸壺 56・57 は外面に指押さえ痕を顕著にとどめる通有のサイズと形態を持つ。紐通し孔を穿つ方柱部の突出があまり目立たない 56 は奈良時代前半期に、やや明確化する 57 はこれよりも下る可能性がある。58 は有溝土錘、59 は小形の棒状有孔土錘。漁網錘はこの2点の出土にとどまり、わずか数点前後の飯蛸壺の検出数と合わせ、海浜遺跡でありながら漁撈具の希薄さは注意される。

第3節 須恵器その他

60～71 は須恵器蓋坏。いずれも小片で全体として出土点数も限定的で、坏蓋 61～63、坏身 66～71 に見るよう古墳時代後期後葉～飛鳥時代中葉に比定できる形態が多い。もっとも坏身 66 は口縁端部に僅かな面が看取れ、古墳時代後期中葉に位置付けうる可能性はある。また、その一方、全体に薄作りで肩部の小突起と端部の小平坦面が看取れる坏蓋 60 や、身部がやや深めの塊形を呈し、外面の回転ヘラ削りも比較的充実した坏身 64・65 のように古墳時代後期前葉ないしは中期後葉に遡りうる資料を少数だが確實に伴っている。

一方、61～63、66～71に直続ないし一部並行するような飛鳥時代タイプの坏類は未確認で、明らかに奈良時代半ば以降に下る高台坏72・73との間に型式的な欠落がありそうだ。

74は短脚化が進んだ高台脚部、75は脚端部片で坏蓋61～63等に伴うか。76は端部を小さく肥厚させた小形壺で、大形の結晶片岩粒が見える。77は小片だが、肩部に二条の細沈線をめぐらし、その間に櫛描波状文を施す。古墳時代後期後葉ないし飛鳥時代前葉に類例のある装飾壺肩部片か。78は小形の壺口縁部で端部を丸く肥厚させる。79は形状と復元径から台付壺もしくは台付壺の脚部片の可能性がある。

80、82は円盤高台形態の須恵器坏で、共に底面に糸切り痕を残す。81は須恵器坏で底面にはヘラ切り痕を見る。

83は黒色土器B類塊で内外面のヘラ磨きが充実する。なお小片から推測した復元径には不安が残る。

84は矮小化した高台を残す瓦器塊。内面に粗い暗文が見える。

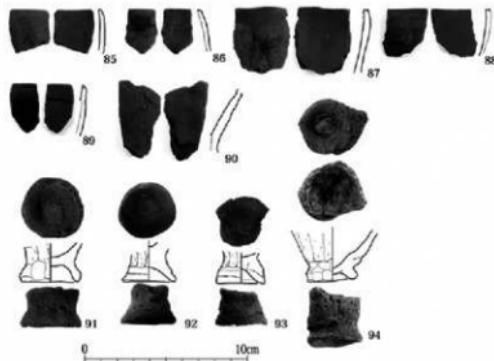


図15 遺物実測図5（備讃II式製塙土器1/3）

91～94は脚台部片。脚径は3cm前後と小振りで低い。体部の開きは弱く外面にヘラ削り痕をよく残す。体部片85～89と脚台部片91～94では香東川様式I類と同質の素地を採用し、角閃石細粒を稠密に含む（写真図版14）。これらは備讃II式新相に分類でき、弥生時代後期中葉を中心とする後葉に残る。一方、素地の様相を異にし、かつやや厚手の体下部片90はII式古相に位置づけられる可能性がある。そうであれば弥生時代後期前葉に遡るだろう。

備讃III式

脚径5cm内外に達し、厚手で大形の倒壺形の脚台をもつ96～102は体下部の形状から備讃III式に分類できる。脚台タイプ製塙土器で体部外面の叩き締めをそのままどめる類を備讃III・IV式とし、このうち体下半の張りが強く体部がほぼ円筒形を呈する群をIV式とする。ここに挙げる96～102の脚台諸例では、102で典型的に示されるように、II式製塙土器に比べれば体部の張りが強まるものの脚上端から体部が斜めに立ち上がる形状を探りこの点から備讃III式に比定できる。弥生時代後期後葉のうちにII式新相とIII式が交替し、III式は古墳時代前期初頭まで存続する。

またIII式では脚台部を分厚く作る傾向も顕著である。97、100は体部下半の張りは102より強いものの、脚台の分厚い作りからIII式に含めた。総じて脚台内面を丁寧にナデ仕上げるため痕跡を読み取りにくいが、98・101では備讃I・II式の成形手法を引き継ぎ、薄い粘土塊で体部下端を塞ぐ（円盤充填）。体・脚台境の器厚からみて他の資料も同様の手法を見られる。

図化可能な体部片は少なく、ここでは口縁部片95を挙げておく。やや厚手だがIV式新相製塙土器体部

片の可能性も残る資料である。外面に叩き縮み痕をよく残し、内面は貝殻条痕とみられる斜位の擦痕が観察できる。口縁端部はヘラで切る。後項で示す備讃IV式最新相の体部片に比べ器壁にかなり厚く3~4mmに達する。

素地の面ではII式新相の特徴であった香東川様式I類土器と同質の素地はもはや採用されない(写真図版14)。III式製塙土器の帰属時期にはなお香東川様式土器の製作は続いていることには留意しておきたい。またII式新相製塙土器とは素地の様相を進めるだけではなく、III式製塙土器の場合、素地調製が一律的ではないことにも注意しておきたい。角閃石粒配合量の際だった突出はないが、II式のそれと同様に配合砂礫では細粒砂を主体として中・粗粒砂が少ない99などの様相を一部で認める。その一方で、円磨があまり進まない粗粒の石英粒が目立つ101があり、さらに101ほどには粗粒物を配合しないが、一定の円磨が進む石英などの中粒砂・粗粒砂が多い95、98、102というように素地の様態は様々である。

備讃IV式新相

103~120は備讃IV式製塙土器の脚台部片である。脚径は2.4~3.6cmと小形化し、大半は、III式製塙土器脚台の2/3かそれ以下に縮小し、

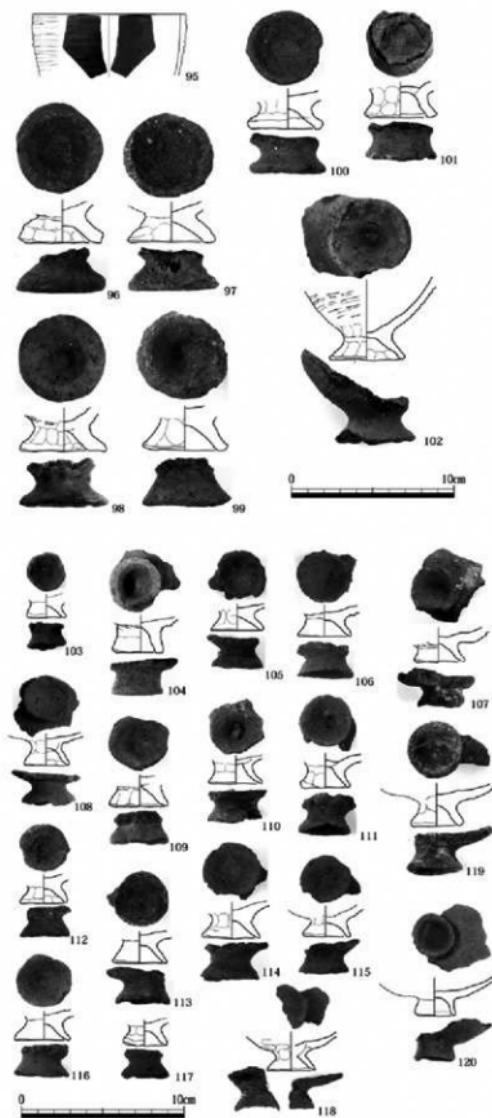


図16 遺物実測図6 (備讃III・IV式新相製塙土器 1/3)

それに応じて薄手化する。Ⅲ式脚台の倒壊形の形状をそのまま小形化したものが多いが、104、120等のようにごく低い円柱形に転じた形態も散見される。また体下部まで残存する118～120ではこの部分が脚台上部ほとんど水平に開く形態となっている。体下部に脚台を付設する製塙土器の末期に近い一群ではあるが、いよいよ脚台の機能を完全に喪失し痕跡的な突起を付加するにすぎない香川県大浦浜遺跡（図21-8）や広島県大浜広畠遺跡（図21-9）などの最末期の形態にまでは至っていない。

また110、111、118などから、ここまで脚台を小形化しながらなお円盤充填法を採用していることがわかる。素地の面ではⅢ式ほどの多様さは解消されている。総じて配合砂粒の細粒化が進む傾向にあり、円磨化した砂粒を主体とする。104のようなお石英を主体とする中粒・粗粒砂を多く含む個体も少数見られるが、多くは基本的に中粒砂以下を中心とし、鉱物種の面でも乳白色を呈する長石や角閃石細粒を多く含む118のような個体が目につく（写真図版14・15）。

なおIV式新相土器では104、107、119等のように器表に灰白色付着物がこびりついた個体（写真図版11）が目につく。出土地点の問題もあるかもしれないが、こうした灰白色付着物は備讃Ⅱ式・Ⅲ式・Ⅳ式最新相資料では定かではなく、後節で示す備讃Ⅵ式にも多いことを特記しておきたい。

備讃Ⅳ式最新相

いよいよ形骸化した体下部の脚台痕跡をも最終的に除去した一群を備讃Ⅳ式最新相とする。これを脚台タイプ製塙土器の最末期に位置づけることは一見、形容矛盾のようだが、まま製作途上まで体下部に設けていた小突起を最終的に除去した形跡が観察されることに留意し、形態・容量・製作手法の面で取扱われるIV式新相製塙土器との連続性に留意した分類である。また脚台タイプに続き大阪湾岸～紀淡海峡部で盛行する、容量の極小化した小形塊タイプ製塙土器とは明確に区別しておく必要性も重視したものである。

備讃Ⅳ式最新相製塙土器は11trなどから一定量出土しているが、極薄手の作りのため大半は細片化し図化・提示が困難である。ここではかろうじて器径を復元した資料を中心に挙げた。なお図示したとおり小片からの復元でありその分精度が劣ることは否めない。

器厚はいずれもごく薄く口縁部や体中位部では2mm内外で、底部片の局所的に厚い箇所でも3mm台後半に達することはない。復元口径は6.2～9cmとなる。体中位～下部片では8cm前後から9cm台に復元できる。

口縁部～体中位部の外面には明瞭な叩き縮め痕が残る。体下部片では外面を叩き縮めた後の内面上げと関連して叩き縮め痕跡は潰れる。なお叩き縮めは底面までは及ばない。口縁部～体中位部内面では縱方向の絞り目が多く観察される。内面はナデ仕上げが多いが、底部片130では薄い板状器具の押し当て痕が残る。口縁部の小片124では特徴的な微細な圧痕が連続し、ヘナタリ科などの小形の巻き貝を回転させて器面を整えた痕跡かもしれない。また上記した底部片130外面には小突起を最終的に押しつぶした痕跡を明瞭に残す。

内外の器面調整痕や器厚は古墳時代中期後葉以後の小形塊タイプ製塙土器、とくに河内型製塙土器に似る部分もある。しかし小形塊タイプ河内型製塙土器では口径は3～4cm台ときわめて小さく、IV式最新

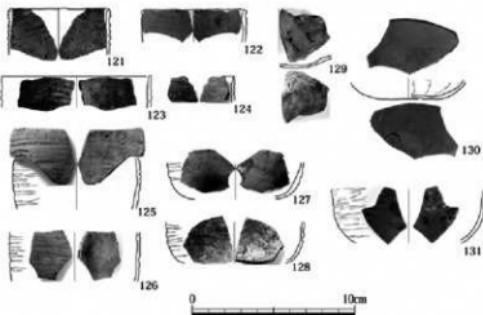


図17 遺物実測図7（備讃Ⅳ式最新相製塙土器 1/3）

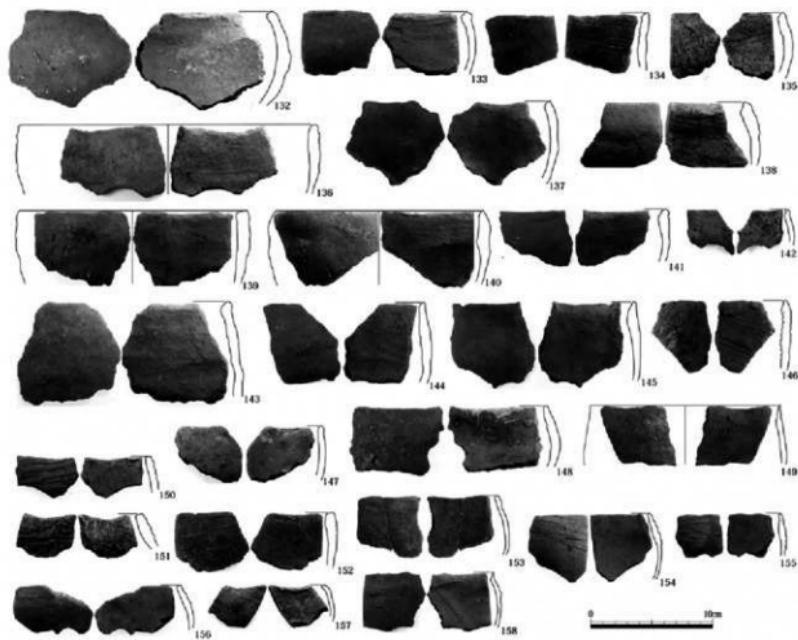


図 18 遺物実測図8 (備讃VI式製塩土器1 1/4)

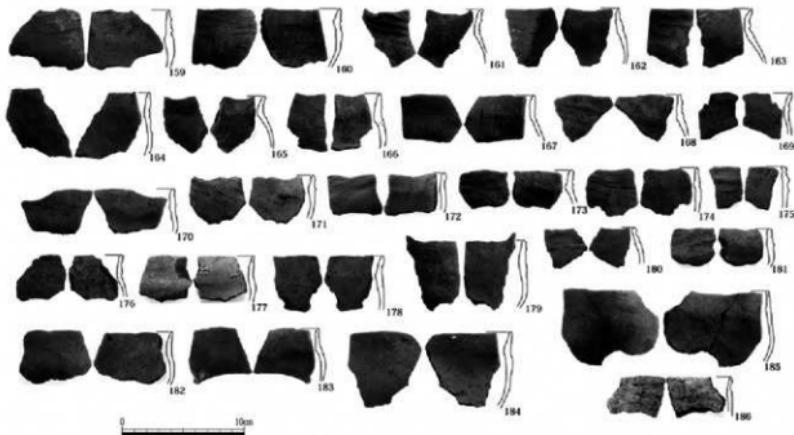


図 19 遺物実測図9 (備讃VI式製塩土器2 1/4)

相との差は大きい。

素地の様相もまた変化している。器壁の薄化に対応するように素地の配合砂はいつそう細粒化傾向を強める。シルト以下レベルの細粒物を多く交える資料が目立つ。ただし配合鉱物種の様相は一様ではなく、長石や角閃石が目につく個体（125）と雲母無粒ないし火山ガラスを含む個体（122・129）などの差異がある（写真図版 15）。

備讃VI式

備讃VI式製塙土器では形態の点で口縁部を強く内彎させる類（132～158）と、短く直立する口縁部から鈍く屈曲して体中位部がやや張り出す類（159～186）に大別できる。後者では口縁直立部外面に叩き締め痕をとどめる資料が多いが、前者でも口縁部に叩き締めを加える資料（146、150～157）はあるものの圧倒的に少数派である。

前者では厚手の個体が多く、その場合、口縁部附近をやや肥厚させる傾向が強い。132 や 135 のようにその部分の器厚がほとんど 10 mm に達するものもある。口縁部附近の器厚が 5 mm を下回る事例は多くはない。口縁部に叩き締めを加えない多数派では、外面全体に指押さえによる凹凸を顕著に残し、内面には概ね横方向の擦痕が目立つ。内面擦痕は肋状の明瞭なおそらくアナダラ属二枚貝を用いた例（132、135など）が目立ち、その他も原体幅や擦痕の様相から二枚貝なし小形巻き貝をハケ原体の代用品として用いたようだ。また外面では上記した指押さえの後に生じた細かな亀裂が目立つ資料（135、136など）が多いが、内面調整（擦痕）に対応する痕跡であろう。

前者のうち外面に叩き締め痕を残す一群は、この一群の中では相対的に薄手で、叩き締め痕が残る口縁部の内面には指押さえが、屈曲部以下を丁寧なナデ調整で平滑に仕上げる。

後者は絶じて薄手で、この叩き締めは、口縁部を肥厚させる代わりに、この部位の強度を高める目的とみられ、叩き締めの範囲はごく狭い。対応する口縁部内面では指押さえ痕がまま残る。以下の叩き締めが及ばない部位では器壁を外方に押し出すように内面を強くなでつける。その結果、叩き締めを施した口縁部附近が直立し、その直下で鈍く屈曲して体中位をやや膨らませた形態を作り出す。

叩き締め原体は単純に併走する構を刻んだものが大多数を占め、牛窓半島周辺や塩飽諸島～児島西部地域のVI式製塙土器に見る複雑な原体意匠はほとんどない。わずかに 185 で細線の格子刻み原体をみるとすぎない。

素地の面では絶じて粗粒砂・中粒砂を多く含む。石英などのやや粗粒の白色鉱物と細粒の雲母や角閃石が目立つものが一般的ではあるが、配合状態は一様ではなく、上記した形態や調整手法の差異と素地調製パターンの相関は明確ではない。その一方、ごく少数例だがこれらとは大きく様相を違える資料を伴う。全体の色調は褐色を呈し角閃石細粒を非常に多く含む 175 と橙白色で円磨の進んだ粗粒の白色／有色鉱物が目立つ 186（写真図版 16）で、少なくとも素地配合砂礫の採取地が他の大多数とは異なる可能性が高いだろう。そうした異質な少数派製塙土器がこの製塙作業地点に混在する背景は気にかかるところである。

備讃VII式

いずれも小片で全体形を知りうるものはないが、187～191について備讃VII式製塙土器の可能性を示して

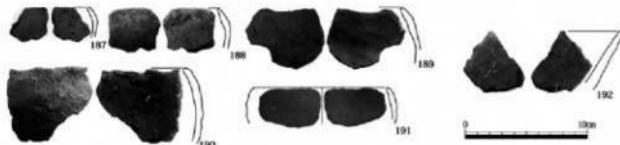


図 20 遺物実測図 10（備讃VII式製塙土器・焼塙土器 1/4）

おく。備讃VII式は全般的な薄手化と口縁部の顕著な内輪傾向および尖底形態を特徴として、香川県倉浦遺跡資料を標式として設定したもので、倉浦式とも称する。VI式で多く採用された口縁部附近の叩き締め技法は跡を絶ち、多くの場合、外面全体に指・掌紋をよく残す。明らかな尖底部片は未確認で、かつ典型例に比べやや厚手の感は否めないが、口縁部の顕著な内輪傾向と叩き締め技法の欠落等に留意して、ここではVII式製塙土器に属する可能性を挙げておく。いざれも外面は指押さえによる凹凸が顕著な一方、内面はナデ仕上げで平滑となる。なお備讃VI式製塙土器に比べ、その出土量は決定的に少ない。

焼塙土器

わずか1点だが、内面に布目痕をよく残す焼塙土器が出土している(192)。海浜遺跡にもかかわらず出土点数の希少さがかえって奇異だが、限定的な調査規模でもあり、評価は難しい。小片のため確定的ではないが、おそらく円錐形を呈すると見られる。器厚は1cm内外と厚手である。

白色凝固物

白色凝固物はVI式製塙土器を含む層位から16trと11trで検出している(写真図版13)。サイズは掌大の大形塊から2~3cm角の小片まで様々である。白色ないし灰白色を呈し、未分析だが質感は燃料等の残滓=灰が凝結したようにみえる。直接的な被熱の形跡はない。海砂由来の円磨度の高い粗粒砂を多く混じ、まれには1cm台の小円礫を交える。発泡したように多くの空隙があり脆い。まま微小貝類が混入し、表面に草本類の茎葉痕をとどめることがある。一部に平坦な面を残す塊もある。しかし強度や形状からなんらかの構造物の部材とはみなしがたい。むしろ上に挙げた種々の状況からは一案として次のようなことを想定しておきたい。水などに溶かされた砂礫や微小貝片の混在する大量の白色細粉物が、草束などが折り重なる場に廻棄されその場で脱水・固化した結果とみる。出土状況からはそうして生成された凝固物をさらに移動した状態と考える。またIV式新相やVI式製塙土器の一部で器面上に付着する白色物質と類似する。

同様の白色凝固物は香川県船越八幡遺跡や与島大洲浜遺跡などの土器製塙遺跡でも存在が報じられており、製塙作業のいざれかの工程に関わる排出物の可能性が想定されてきた。今後、機会を得て詳細な分析を検討する必要がある。

表1 掘載遺物出土地点一覽

第6章まとめ -鵜羽神社境内遺跡の消長と土器製塩の展開-

第1節 鵜羽神社境内遺跡出土遺物の構成

鵜羽神社境内遺跡の調査では総計約 90 kg の土器類が出土した。このうち製塩土器諸型式と判断される土器量は約 74 kg 弱に達し全体の 82% となる。後述するように製塩土器では古墳時代後期後葉以降の備讃VI式製塩土器が 95% 以上を占め、これより先行する備讃II式・III式・IV式新相・同最新相はごく限定的だ。また備讃VI式より後出する備讃VII式製塩土器に比定しうる小片若干も確認しているが、いっぽうその量は乏しい。製塩土器の構成と製塩活動の消長については後節であらためて述べる。

日用土器類では弥生土器及び古墳時代以降の土師器類が約 14 kg で全体の 17% 弱を占めるのに対して、須恵器類（含む須恵質土器）はごく小片ばかりで 1.3 kg にすぎず、全体の 1.4% 程度と弥生土器・土師器類の 1/10 以下に留まる。

また土器類以外では、海浜部に立地するにもかかわらず、これまでのところ 10 点未満の飯蛸壺と小形土錐 2 点を確認したにすぎない。漁撈具の極端な少なさにあらためて注意しておきたい。

第2節 日用土器諸器種からみた活動の消長

まず日用土器諸器種からみれば、その上限は弥生時代後期初頭（1・13）に遡り、量は多くないが、弥生時代後期各期の遺物が存在し、布留式古相甕（31）などの存在から古墳時代初頭まではかろうじて確認できる。出土遺物量が限定的で難しいが、以後の古墳時代前期の大部分から同中期にかけてはいっぽう断片的であって、現境内地付近の継続的な利用は疑わしいかもしれない。

小片のため確定的ではないが、わずかだが須恵器蓋坏（60・64・65・66）から古墳時代後期前葉～中葉における活動の形跡を読み取ることができる。続く後期後葉～飛鳥時代前葉では若干だが出土点数は増加し、この期に比定できる須恵器蓋坏（67～71）と壺（77）が確認できる。しかし興味深いことに飛鳥時代中葉～末では出土遺物から見る限り、この地点における活動形跡は観察しがたい。奈良時代半ば～平安・鎌倉時代の遺物は断片的に見いだせるが、その量は決して多くはない。

ここで少し、弥生後期～古墳時代前期の土器類の構成をみておこう。甕を例に挙げると、未掲載の小片を含め口縁部片は計 52 点を確認している。うち 42 点は弥生後期末以前に属する可能性が高い。これらでは香東川様式甕が 20 点（48%）を占める。この構成比は本遺跡の位置からみてやや高いが、極端なものではない。しかし香東川様式甕（1 類）は 9 点で半数に及ばない。他方 2 類素地では雲母細粒が目立つ細粒類が大半を占める。これは鹿伏中所遺跡など平野東縁部に多い素地類型である。つまり大勢としては高松平野東縁部の構成に通じるといえるだろう。

また古墳時代前期では布留式（系統）の甕が多い一方、高松平野部などでまとみとめられる香東川様式甕の後繼形態はみえない。少ない資料から深追いはできないが、古墳時代前期つまり III・IV 式製塩土器並行期に日用土器類の構成が変化するようだ。

第3節 鵜羽神社境内の地形区分と活動

あらためて整理しておくと、鵜羽神社境内は 3 つの地形区分にまたがる位置にある。第一に南東部から続く山麓扇状地面（境内地南東部）、第二に境内地北方の谷地形の側面に相当する部分（境内地北部）、第三に扇状地面の前面にとりつく海浜砂堆部分（境内地西部）である。なおこれまでの調査では、第二（谷地形）と第三（砂堆）の平面的関係を復元するデータは十分ではない。おそらく境内地中央の本殿一帯

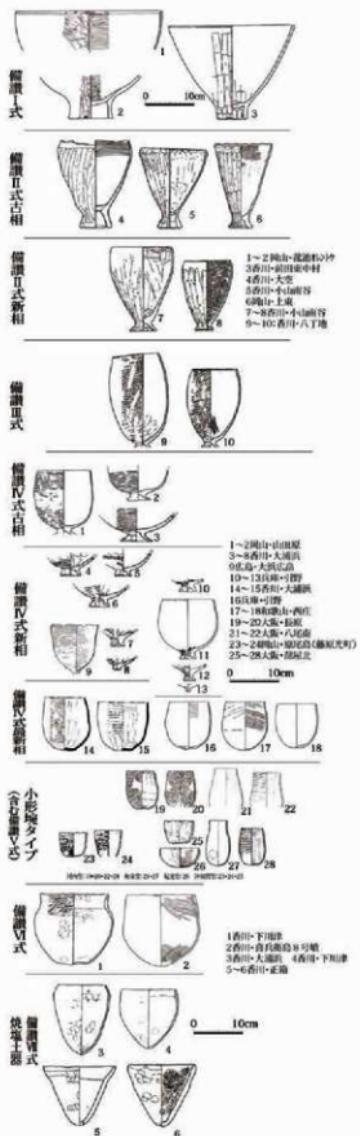


図21 備讃瀬戸海域製塙土器編年表

殿付近まで砂堆が続き、それより北側で谷地形の影響を蒙るだろう。

さて地形的には、安定した山麓扇状地連続部分=境内地南東方向が本来的な遺跡の中心部分であったと思われる。今回の調査ではVI式製塙土器廃棄層の広がりや後代の擾乱によって十分な材料を得ているわけではないが、北側谷部で出土した弥生土器等に摩耗した形跡は目立たず、離れた西方の谷奥部から流入した可能性は少ない。南側の扇状地面から入り込んだ土器類であろう。須恵器類は砂堆部分の調査区からも出土しているが、擾乱を蒙るなどして全体に出土量の乏しい扇状地面やこれと砂堆の境界付近に多い。なお須恵器類など主として古墳時代後期以降の土器類が谷部からほとんど出土しないことは、境内地部分での谷部(谷肩部)埋積の進捗や、扇状地面の南寄り部分にむかって中心地がやや移動しているのかもしれない。

一般に海浜遺跡において砂堆部が生活上の中心地となることは多くはない。とくに本遺跡のような未発達で狭小な砂堆であつてはなおさらである。砂堆部は日常生活拠点とは区別された特定の生業に関わる作業場として機能することが多い。鶴羽神社境内遺跡においても例外ではなく、扇状地面の先端にまで及んだVI式製塙土器廃棄層の出土資料を除けば、各期製塙土器の大半は砂堆部から出土している。

砂堆部は当然、漁撈活動の舞台にもなりうるが、上記したとおり漁撈具の出土量はごく乏しい。製塙活動の場と漁撈活動のそれを区分していたことを示唆する。

第4節 鶴羽神社境内遺跡における土器製塙の展開

鶴羽神社境内遺跡から出土した製塙土器は備讃II式古・II式新・III式・IV式新相・IV式最新相・備讃VI式および若干量の備讃VII式小片からなる。また一点だが内面布目タイプの焼塙土器がある。

5章及び写真図版に掲載した製塙土器諸型式は小片ばかりなので、参考までに備讃瀬戸海域周辺

の製塩土器編年図を図21に示しておく。鶴羽神社境内遺跡ではどうやら弥生後期～奈良時代の製塩土器諸型式を網羅しているわけではない。底面が強く開きコップ形を呈するが、まだ脚台の萎縮が始まらない備讃IV式古相が欠落する。また古墳時代後期前～中葉に比定される備讃V式（＝小形塊タイプ沖須賀型）も確認できない。また備讃VI式に続く、飛鳥時代後半～奈良時代に比定できる備讃VII式もその存在を推測したがそれらはごく僅かな出土量にすぎない。

統いて製塩土器出土量の内訳を示しておこう。総重量で74kgに達する製塩土器のうち、備讃VI式製塩土器（ごく一部備讃VII式土器片を含む處はある）は70.5kgで製塩土器全体の78%を占める。備讃II式（古・新相）は0.4kg、0.4%だけだ。備讃III式とIV式新相製塩土器は、体部片では分別困難なため一括すると約2.4kgで2.7%を占める。極薄手のIV式最新相製塩土器は0.5kg、0.6%となる。備讃VII式製塩土器は口縁部片ではごく少量しかなく、体部片では必ずしもVI式製塩土器との分別が難しいので省略する。

鶴羽神社境内遺跡における土器製塩活動の盛期は明らかに古墳後期後葉～飛鳥前半の備讃VI式期にある。また備讃VI式のうち古相となる厚手タイプから飛鳥時代に下るとみられる薄手タイプまでが見いだせるので、この間においては持続的ないし高い頻度の反復的操業を想定できる。6t～8tにかけて扇状地面に達するこの期の廃棄製塩土器層の広がりを確認している。工程的に先立つ採鹹工程・採鹹作業場との関係から、香川県喜兵衛島南東浜遺跡で明らかにされたように製塩土器廃棄層は煎熬作業場＝製塩炉に近接してその背面に形成されることが多い。その点を考慮すれば現本殿・拝殿後面附近に煎熬作業場が位置し、膨大な製塩土器の消費量ゆえに廃棄土器層が裏面扇状地面の一部に乗り上げた格好となつたとみられる。

VI式製塩土器に比べればごく少ないが、次いで備讃III式・IV式新相製塩土器の出土量が他型式よりも多い。厳密ではないが脚台部片でみればIV式新相製塩土器はIII式製塩土器の少なくとも3倍程度となるだろう。対して備讃II式製塩土器、IV式最新相製塩土器は重量比ではIII式・IV式新相製塩土器の数分の一でしかない。備讃IV式新相以前では、出土傾向から明らかに砂堆部の一角に煎熬作業場が設けられたとみられる。その点も11t下層で検出した焼結粘土塊の性格を推測する一つの手がかりとなるだろう。また境内地北半の谷部におけるIV式最新相以前の製塩土器諸型式出土量の決定的な乏しさは、出土総量に加えて、作業空間の限定から一面ではこの期間の土器製塩作業の小規模さを反映すると思われる。

また既にIV式古相製塩土器の欠落については言及したが、5章で触れたようにIV式新相製塩土器でも最も脚台の矮小化が進んだ最末期の形態をここでは確認していない。IV式新相期と同最新相期の間にも若干の断絶期間を見込むべきかもしれない。

さて、かかる操業の中斷は、このような製塩土器型式の移行期では比較的認識は容易だが、一つの製塩土器型式の存続期間内で発生した場合は当然ながらその把握は難しい。そうすると廃棄土器の絶対量もまた操業の継続性を検討する一つの手がかりになりうることを認識しておくことが必要だと思う。これまで知られている製塩炉のサイズや製塩土器の廃棄単位から一回の煎熬作業で少なくとも20～30個体を使用し、事後大半を廃棄したことは間違いない。したがって、一つの製塩土器型式の存続期間を通じて作業が継続したならば、季節的な操業であって操業の規模が小さい場合でも、廃棄土器量は日用土器類の消費量とは桁違いに膨大なものとなるだろう。そうではない場合には単発的とはいわないまでも、ごく反復頻度の低い、間歇的な操業の可能性も視野に入れておくべきかと思われる。

ごく限定期的な調査の成果から無理に推測を重ねるべきではないが、出土製塩土器の型式的な連続性とは一応切り離して、出土製塩土器量の面に留意して操業の持続度合を検討すべきではある。

最後に以上の動向を図22～26を参照しながら備讃瀬戸海城周辺の製塩土器出土遺跡分布の時期的变化と対比しておこう。

備讃Ⅱ式（古・新相）段階では本土沿岸の比較的大規模な集住地の一角で操業することが多い。岡山県百間川原尾島遺跡や香川県木太中村遺跡などはそうした典型といえる。鵜羽神社境内遺跡のような立地の遺跡が目に見えて増加するのは備讃Ⅲ式期以後となる。ただし備讃瀬戸海域周辺では備讃Ⅳ式新相期から急速に遺跡数は減少する。備讃Ⅳ式新相～最新相期から土器製塩の主たる舞台は大阪湾岸周辺に移行しており、備讃瀬戸海域周辺全体で衰退する。この点で、Ⅳ式古相期が欠落し、同新相期に再開が想定できる本遺跡の消長は、やや大勢からずれるように見える。

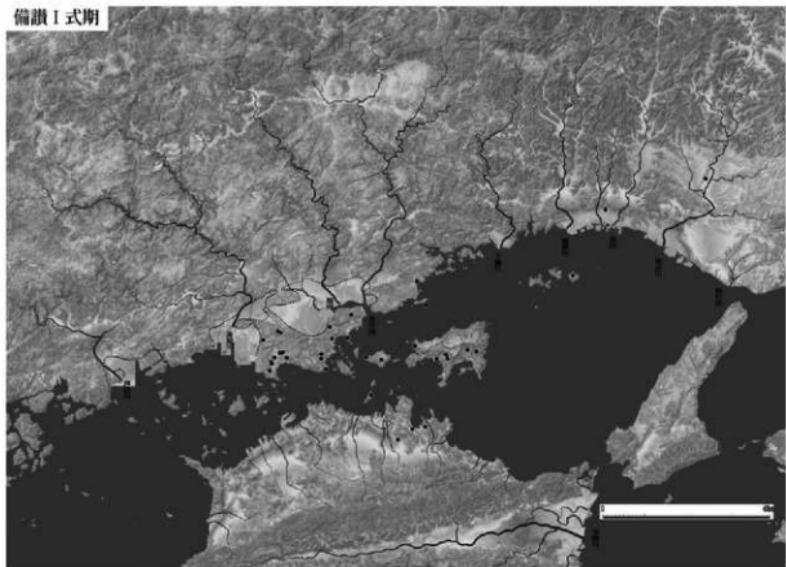
備讃Ⅴ式製塩土器の初現は古墳時代後期初頭に下る可能性が高く、備讃Ⅳ式最新相の終焉以後、ほとんど古墳時代中期中葉～後葉の間、備讃瀬戸海域周辺では土器製塩の廃絶が想定できる。土器型式から備讃Ⅵ式期の土器製塩は大阪湾岸の小形塊タイプを使用する製塩技術の移植を契機とするとみられる。しかしこの期の製塩遺跡数はごく限定的なものにとどまっている。一転して古墳時代後期後葉～飛鳥時代前半に備讃瀬戸海域の土器製塩は最盛期を迎える。こうした古墳時代中後期における海域全体の動向と本遺跡の消長は一致している。

さて備讃Ⅵ式期以後の全般的動向だが、備讃瀬戸海域ではかつて想定されていたほどに備讃Ⅶ式期の土器製塩遺跡数は減っていない。塩飽諸島周辺ではかえって遺跡数が増加する傾向にさえある。奈良時代末頃の備讃Ⅷ式の終焉を以て備讃瀬戸海域における土器製塩は廃絶する。

軽々な推測は禁物だが、本遺跡におけるこの期の急速な土器製塩の衰退ないし停止は必ずしも備讃瀬戸海域の全般的な製塩動向に照して説明できるものではなく、そこには個別的事情があるのかもしれない。その場合、日用土器類についても飛鳥時代半ばから奈良時代前半期の欠落が推測できることを加味すれば、山上における古代山城・屋嶋城の築造と土器製塩の停止が相関する可能性も一応は考慮しておく必要はあるだろう。

以上、鵜羽神社境内遺跡の消長と土器製塩の展開について概観した。

備讃 I 式期



備讃 II 式古相期

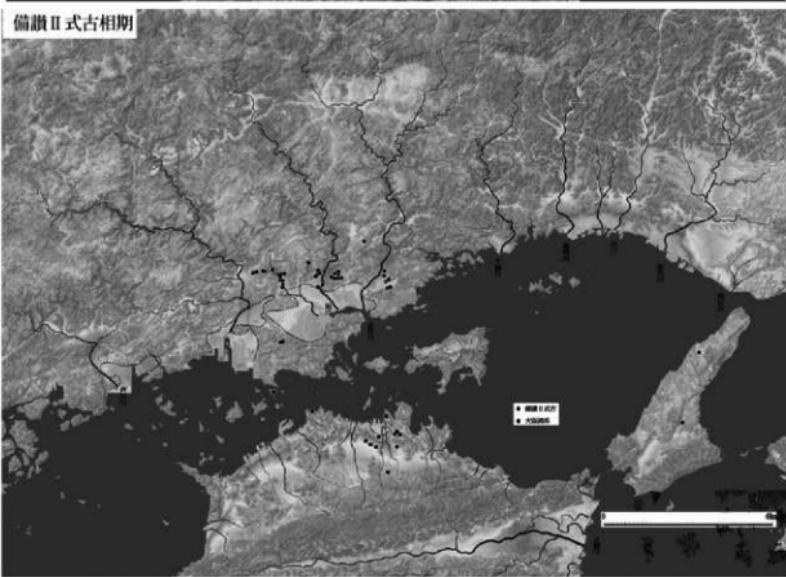
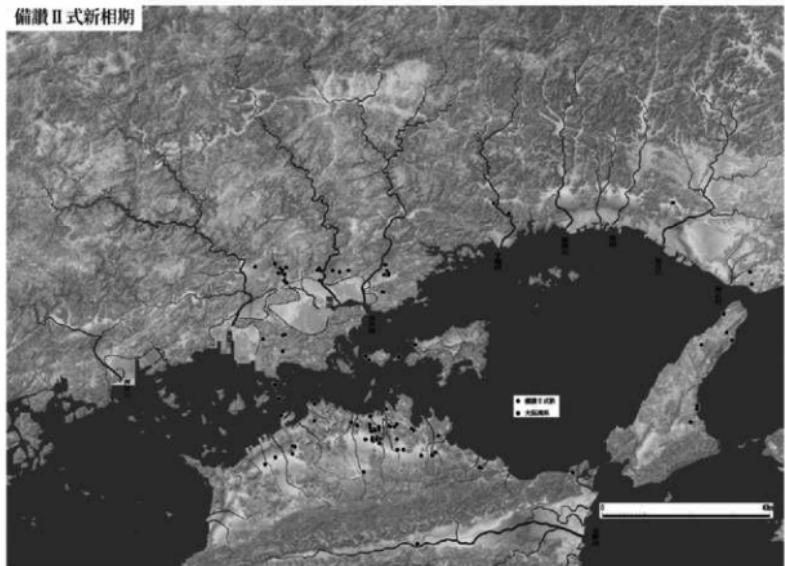


図 22 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塙土器出土地点分布 1

備讃Ⅱ式新相期



備讃Ⅲ式期

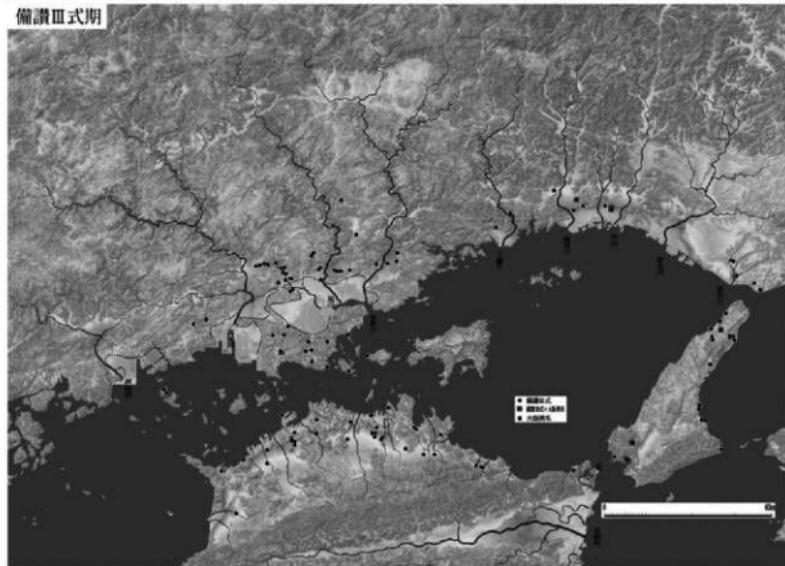


図 23 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塙土器出土地点分布 2

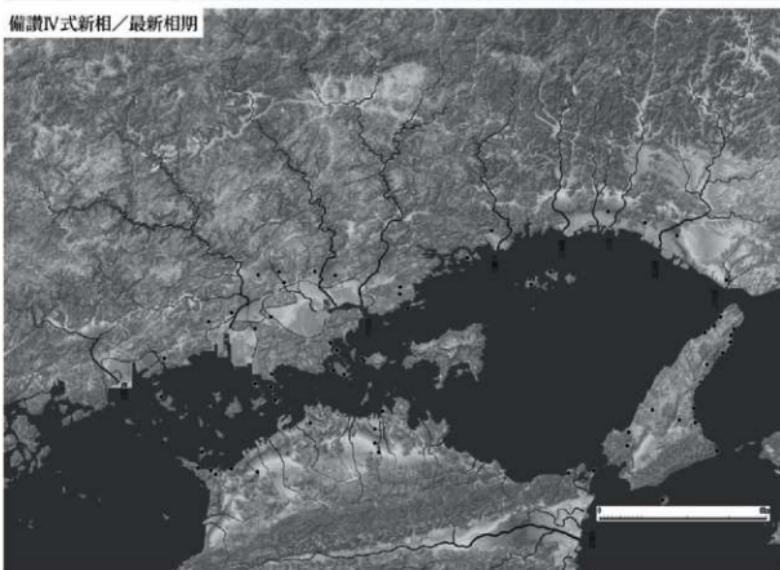
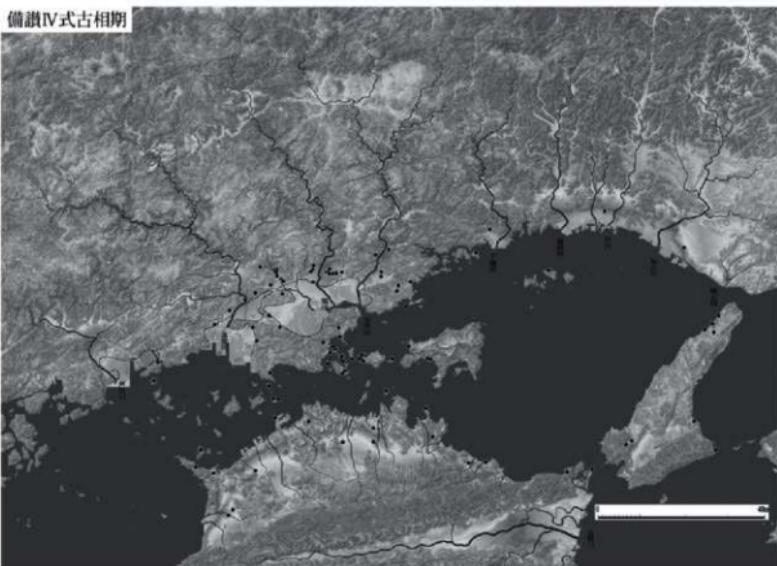
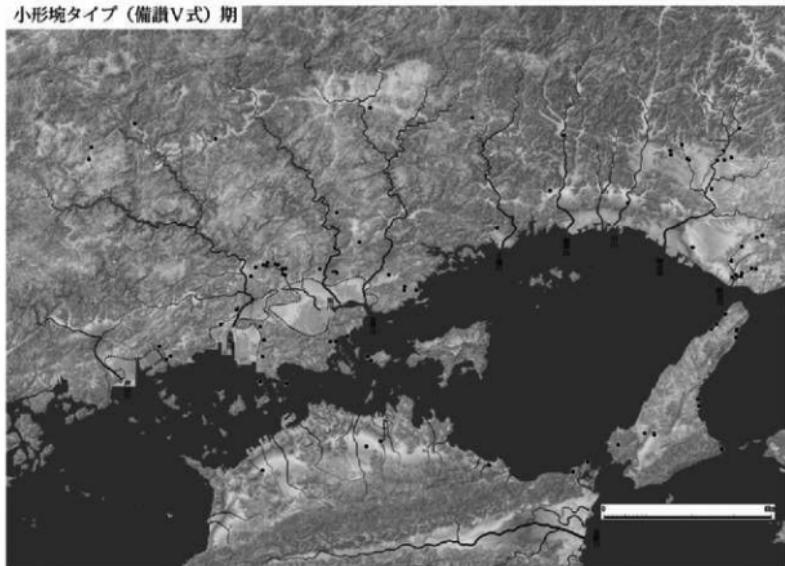


図 24 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塙土器出土地点分布 3

小形塊タイプ（備讃V式）期



備讃VI式期

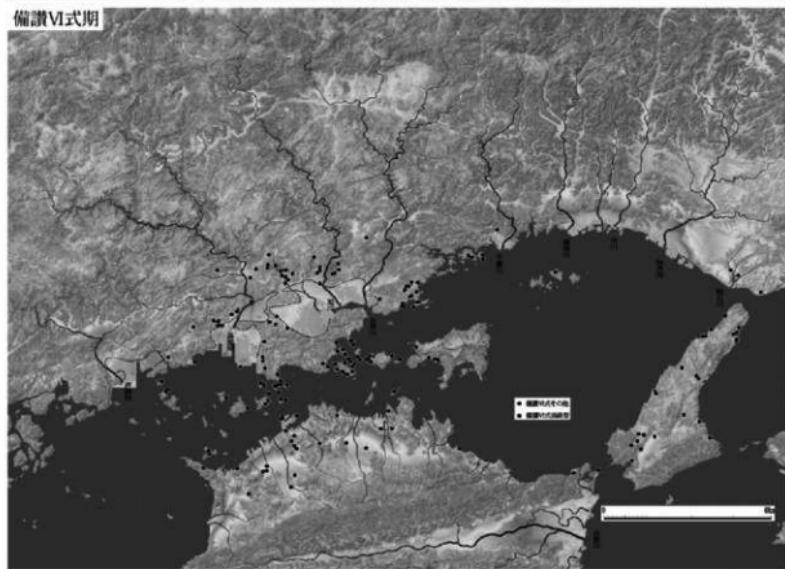
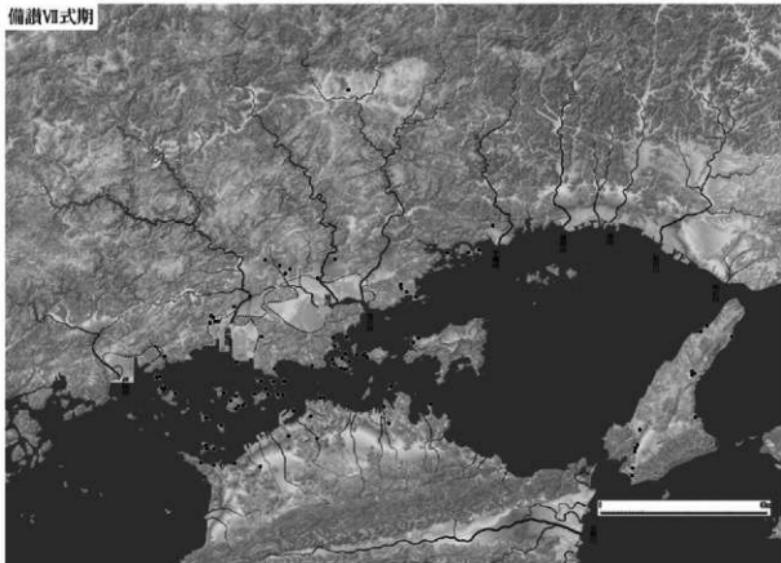


図 25 備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塙土器出土地点分布 4

備讃VII式期



焼塩土器

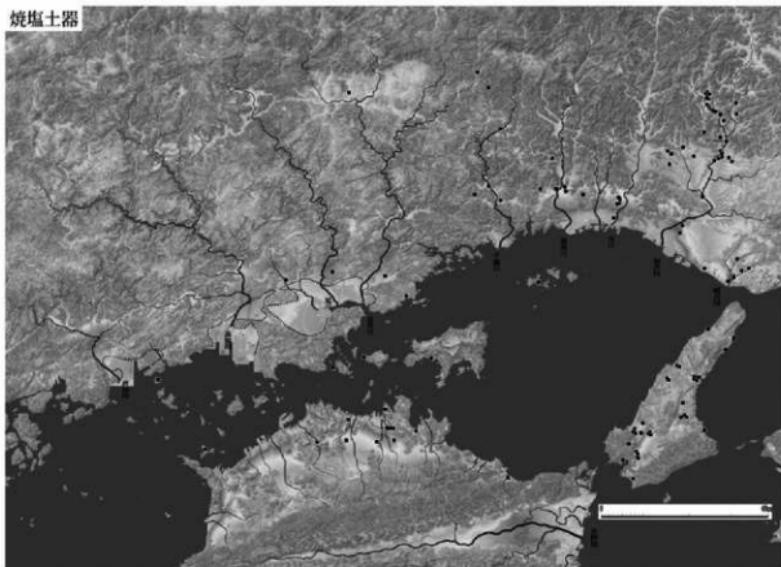
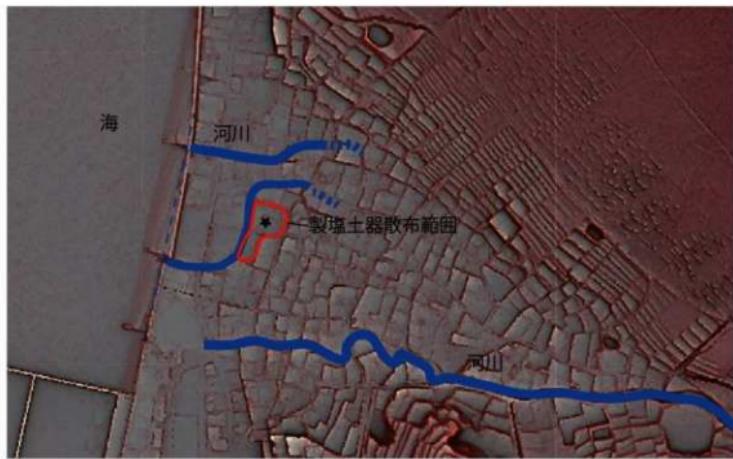
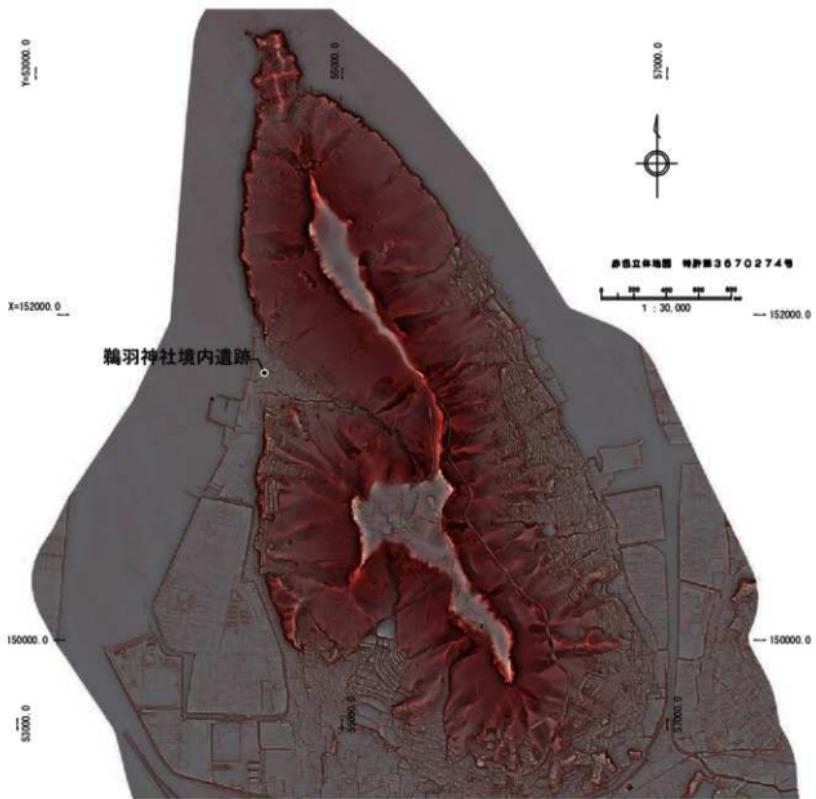
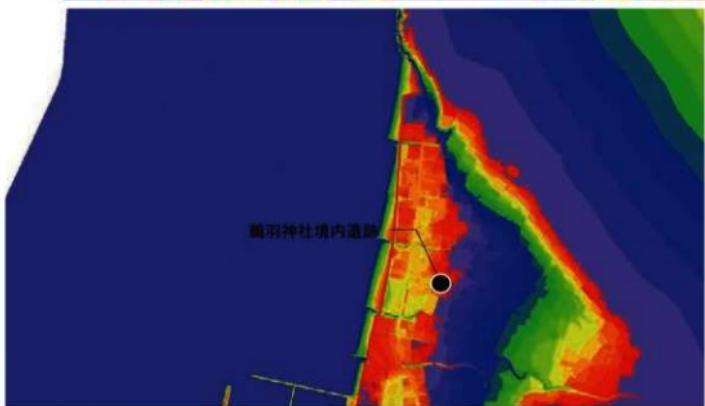
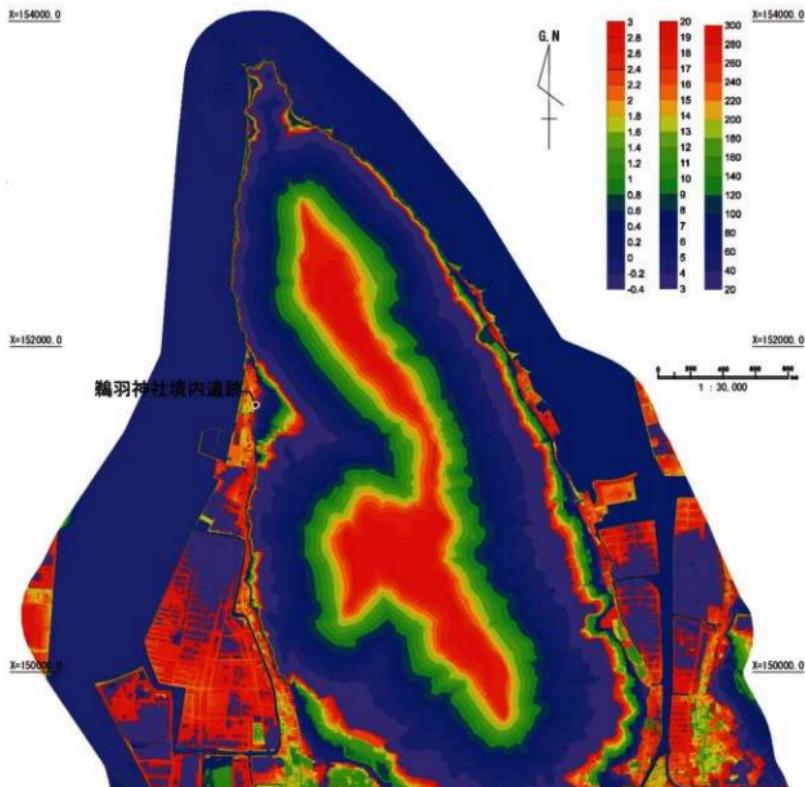


図 26

備讃瀬戸・播磨灘海域周辺製塩土器出土地点分布 5



卷末図版1 赤色立体図と調査地周辺の地形に関する所見（下段はスケールアウト）



卷末図版2 調査地周辺の段彩図（下段はスケールアウト）



瀬戸内海と鵜羽神社境内遺跡 遠景（西から）



鵜羽神社からみた屋島 右は谷へ続く道（西から）



調査中の鶴羽神社境内（西から）



2014年度調査風景



2015年度調査風景



調査後の養生状況



埋め戻し完了状況



1 tr 完掘状況及び南壁断面

4 tr 完掘状況及び南壁断面



4 tr 断割中焼土検出状況



5 ~ 8 tr 調査状況（南から）



5tr 上面の攪乱



5 ~ 8 tr 調査状況（南から）



5 tr 完掘状況及び南壁断面



6 tr 完掘状況及び東壁断面



6 tr 廃棄製塙土器層の拡大



7 tr 完掘状況及び東壁断面



7tr 廃棄製塙土器層の拡大



7tr 廃棄製塙土器層の遺物密集状況



8 tr 東壁・南壁断面



8tr 北壁断面にみる遺物包含状況



9 tr 完掘状況及び南壁断面



10tr 完掘状況（西から）



10tr 白色凝固物塊検出状況



10tr 土器集中検出状況



11tr 東壁土層（下面に焼結粘土塊）



11tr 北壁土層（下面に焼結粘土塊）



11tr 焼結粘土塊直下の黒灰色砂層（弥生後期土器包含 北から）



11tr 焼結粘土塊の広がりと周囲の黒化した砂層



11tr 焼結粘土塊検出状況（堀込は 2013 年度試掘 西から）



11tr 焼結粘土塊の広がり



11tr 焼結粘土塊上面と直上被覆土層（西から）



11tr 焼結粘土塊直上の備讃皿式製塩土器出土状況



11tr 焼結粘土塊の広がり (北から)



11tr 焼結粘土塊の広がり (西から)



11tr 焼結粘土塊東西断剖部 粘土塊と直下の堆積物 (北から)



11tr 粘土塊軟質部分と粘土塊直下の礫群・製塙土器 (西から)



11tr 東西断剖部 粘土塊の軟質部分 (西から)



11tr 東西断剖 (部分) 焼結粘土塊と直下の礫群・製塙土器



11tr 東西断剖状況 (南から)



11tr 東西断剖 (全体) 粘土塊と直下の堆積物



11tr 焼結粘土塊 貝殻細片を多数配合状況



12tr 完掘状況及び南壁断面

14tr 完掘状況及び南壁断面



15tr 完掘状況及び南壁断面

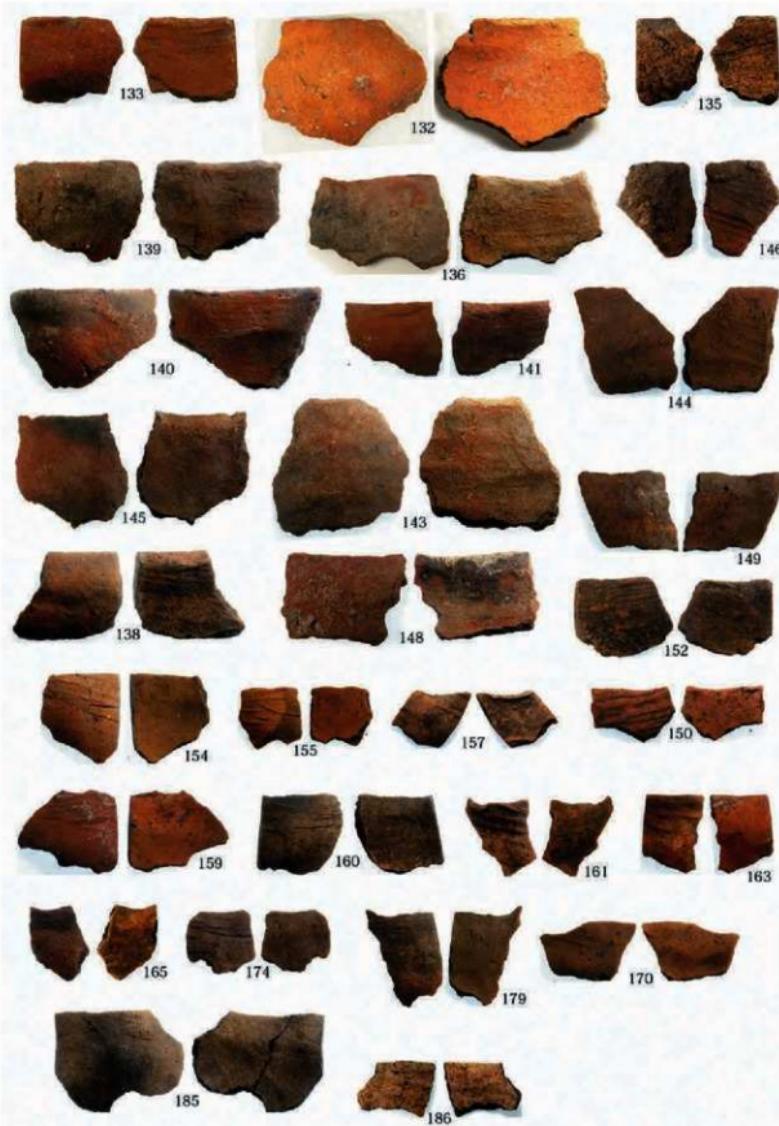
16tr 完掘状況及び南壁断面



弥生土器・須恵器ほか(約1／3)



備讃II式～IV式最新相製塙土器・焼塙土器（約1／2）

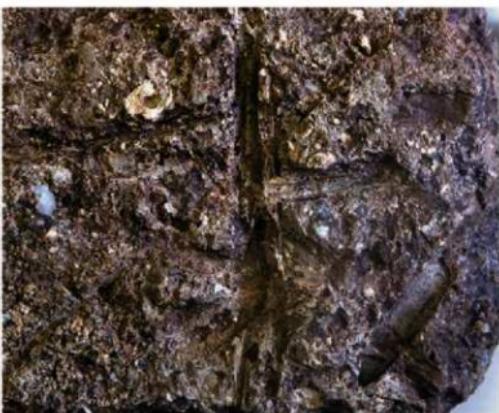




16tr 白色凝固物出土状況



白色凝固物 1 (16tr)



白色凝固物 1 部分拡大（草本類茎圧痕）



白色凝固物 1 部分拡大（微小貝類混入）



白色凝固物 2 (11tr)



白色凝固物 2 (11tr)



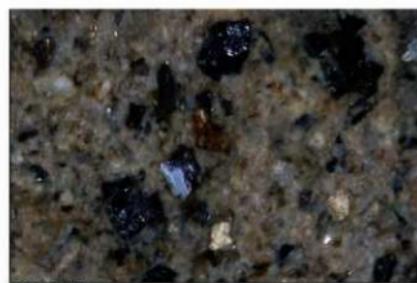
白色凝固物 1 (16tr) 60倍拡大撮影



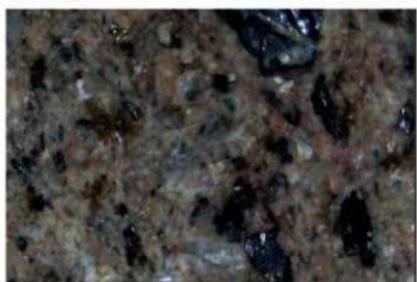
白色凝固物 3 (11tr) 平坦面と草本類茎圧痕



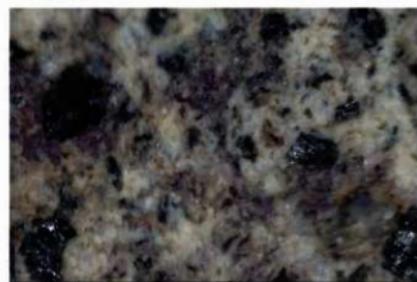
90 (II式)



85 (II式)



87 (II式)



93 (II式)



95 (III式)



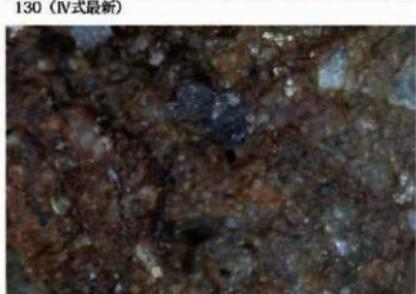
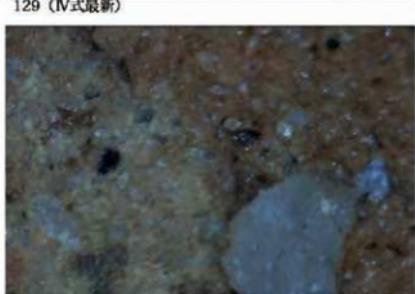
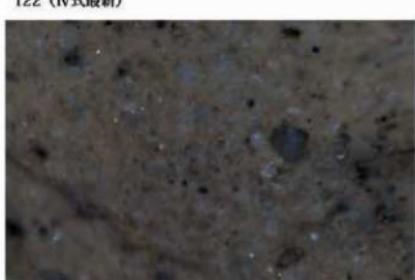
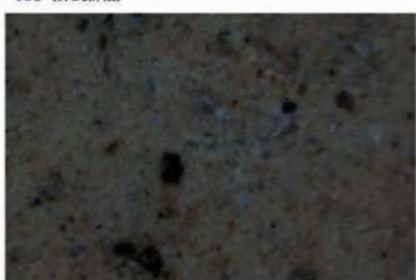
102 (III式)



101 (III式)



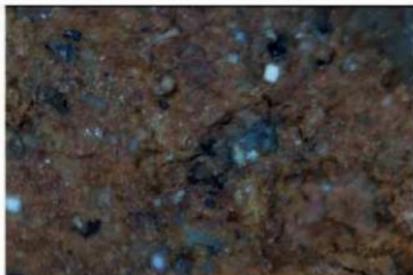
118 (IV式新相)



138 (VI式)



140 (VI式)



134 (VI式)



168 (VI式)



185 (VI式)



186 (VI式)



192 (焼塩)

192 (布目拡大)

報告書抄録

ふりがな	うのはじんじやけいだいりょせき						
書名	鵜羽神社境内遺跡						
副書名・巻次	高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書 第5冊 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書IV						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第 236 集						
編著者名	大久保 徹也(徳島文理大学文学部) 高上 拓(高松市)						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660						
発行年月日	西暦 2022 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	コード 所在地	北緯 。° ′ ″	東経 。° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
うのはじんじやけいだいりょせき 鵜羽神社境内遺跡	香川県高松市 屋島西町	37201	34° 21' 57"	134° 05' 34"	2012. 7. 7 ~ 2015. 9. 8	16 m ²	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鵜羽神社境内 遺跡	生産遺跡 (土器製塩)	弥生時代 後期～古 墳時代前 期 古墳時代 後期～奈 良時代	製塩土器堆 積層 竈状遺構	製塩土器・弥生土器・土師 器・須恵器・漁労具			
要約	史跡・天然記念物屋島の西岸に位置する土器製塩遺跡の実態確認調査。製塩土器の堆積層を厚く確認し、弥生時代後期～奈良時代にかけての土器製塩の消長を整理した。当遺跡の盛期は古墳時代後期後葉～飛鳥時代である。特徴的な遺構として、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の土器製塩に関連すると考えられる竈状遺構が挙げられる。						

高松市埋蔵文化財調査報告第236集
高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書 第5冊
史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書IV

鵜羽神社境内遺跡

2022年3月31日

編集 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部
高松市番町一丁目8番15号
発行 高松市・高松市教育委員会
印刷 (株)成光社

